

東京国立文化財研究所要覧

1992

平成4年度

は　じ　め　に

平成4年度は、東京国立文化財研究所の前身である美術研究所設立以来62周年を迎えた。一昨年発足したアジア文化財保存研究室の活動もいよいよ本格的となり、国際的な文化財保存修復に関する協力のためのセンター構想の充実化に向けて大きく前進した年でもある。その関連事業として、平成4年11月にはアジア15カ国及び国際文化財保存修復研究センター（ICCROM）から文化財専門家を招へいして「木造文化財の保存と国際協力」というテーマで、第3回目のアジア文化財保存セミナーを開催、大きな成果を収めることが出来た。また、諸外国からの強い要望にこたえて、「和紙を用いた文化財の保存修復」の国際研修がこの年からはじめられたのも特記すべきことといえる。一方、1986年から進めてきた敦煌莫高窟壁画保存修復事業については、平成2年度に敦煌研究院と合意書を取り交わし、昨年度より5か年にわたる本格的な日中共同研究が進められている。さらに海外所在の日本古美術品修復事業も昨年に引き続いて、ワシントン・フリア美術館所蔵の日本絵画の修復を実施し、またスミソニアン研究機構との保存科学研究交流も引き続き順調に進行中である。その他の国際交流事業としては、本年度で16年目となる国際研究集会を「東アジア美術における〈人のかたち〉」のテーマのもと、5名の研究者を海外から迎えて、充実した討議が行われた。この他文化財に関する個別的な外国研究者の来訪、研修、共同研究もますますさかんになり、国際的な文化財研究機関として、高い評価を得ることが出来たことは、喜びに堪えない。

この年度を終わるに当って、新井保存科学部長はじめ3名の職員を定年、転出などで見送ることになったが、当研究所の発展に尽力された諸先輩の御努力に対し心から敬意と謝意を表する次第である。

平成5年3月

東京国立文化財研究所長

西川 杏太郎

目 次

I. 沿革	1
1. 設立	1
2. 年代別重要事項	1
3. 歷代所長	6
II. 機構・職員・予算	7
1. 機構	7
2. 職員	8
3. 名譽研究員	11
4. 予算	12
5. 特別研究一覽	13
6. 科学研究費補助金交付一覽	13
7. 受託研究一覽	14
III. 調査研究	15
中長期研究計画一覽	15
1. 美術部	17
(1) 概要	17
(2) 各論	18
2. 芸能部	23
(1) 概要	23
(2) 各論	24

3. 保存科学部	26
(1) 概要	26
(2) 各論	27
4. 修復技術部	34
(1) 概要	34
(2) 各論	35
5. 情報資料部	40
(1) 概要	40
(2) 各論	41
6. アジア文化財保存研究室	45
(1) 概要	45
(2) 各論	45
7. 国際調査研究	49
(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究	49
(2) スミソニアン研究機構との国際研究交流	51
(3) 海外所在日本美術品調査	51
(4) タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査	52
(5) 文化財保護に関する日独学術交流	52
(6) 国際会議	52
8. 主要研究業績	54
IV. 事業	71
1. 出版	71
(1) 美術研究	71
(2) 日本美術年鑑	71
(3) 芸能の科学	72

(4) 保存科学	72
2. 黒田清輝巡回展	73
3. 公開学術講座	73
4. 夏期学術講座	74
5. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	75
6. 国際研究集会	77
7. アジア文化財保存セミナー	79
8. 第1回「紙の保存修復」の国際研修	81
9. 会 議	83
(1) 第4回国際文化財保存修復協力センター〈仮称〉 設置に関する調査研究会	83
(2) 文化財保存修復研究協議会	84
10. 国際・国内交流	86
(1) 職員の海外渡航	86
(2) 招へい研究員	88
(3) 海外研究者の来訪	92
V. 研究施設・設備	93
1. 蔵 書	93
2. 資 料	94
3. 主要機器設備	95
4. 黒田記念室	98
5. 閲 覧 室	98
VI. 関係法規	99

I. 沿革

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原隼二郎及び東京美術学校校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また、わが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192m²の建物1棟を起工した（本館）。

沿 革

- 昭和3年9月 前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また、館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
- 昭和4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
- 昭和5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
- 同 年10月17日 美術研究所開所式を挙行了た。
- 昭和7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
- 同 年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
- 昭和5年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。
明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
- 昭和9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。
- 昭和10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129m²の書庫が竣工した。
- 同 年4月 『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
- 同 年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。
研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。
- 昭和12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
- 同 年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
- 昭和13年2月12日 木造、平屋建、延面積97m²の写真室1棟が竣工した。
- 昭和19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷

間家倉庫に疎開した。

昭和20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年7～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市の外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

昭和21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。

同 年4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

昭和22年5月1日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた（保存科学部の前身）。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66m²）に設けた。

昭和25年8月29日 文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同 年8月29日 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

昭和26年1月31日 美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。

昭和27年4月1日 文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

また、文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同 年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を

沿 革

同大学から借用し、研究を開始した。

昭和28年4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132m²を改造のうえ移転した。

昭和29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。

昭和32年3月22日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8 m²の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえにさらに1階を増築3階建とし、増築分延面積71m²が竣工した。

昭和34年4月30日 東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。

昭和36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。

昭和37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663m²の建物1棟が竣工した。

同 年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同 年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。

昭和43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。

昭和44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41 m²）の起工式が行われた。

昭和45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。

同 年3月25日 芸能部は、別館3階に移転した。

同 年5月8日 保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。

同 年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。

同 年11月2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した(本館は、美術部庁舎となる)。これにより研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

昭和46年4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658m²を東京国立博物館から所管換された。

昭和48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

昭和52年4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室および写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

昭和53年3月20日 本館構内の写場等(木造平屋建延面積144m²)を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積565.95m²の建物が竣工した。

昭和53年4月5日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

昭和59年6月28日 文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。

平成2年10月1日 文部省設置法施行規則の一部が改正されて新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。

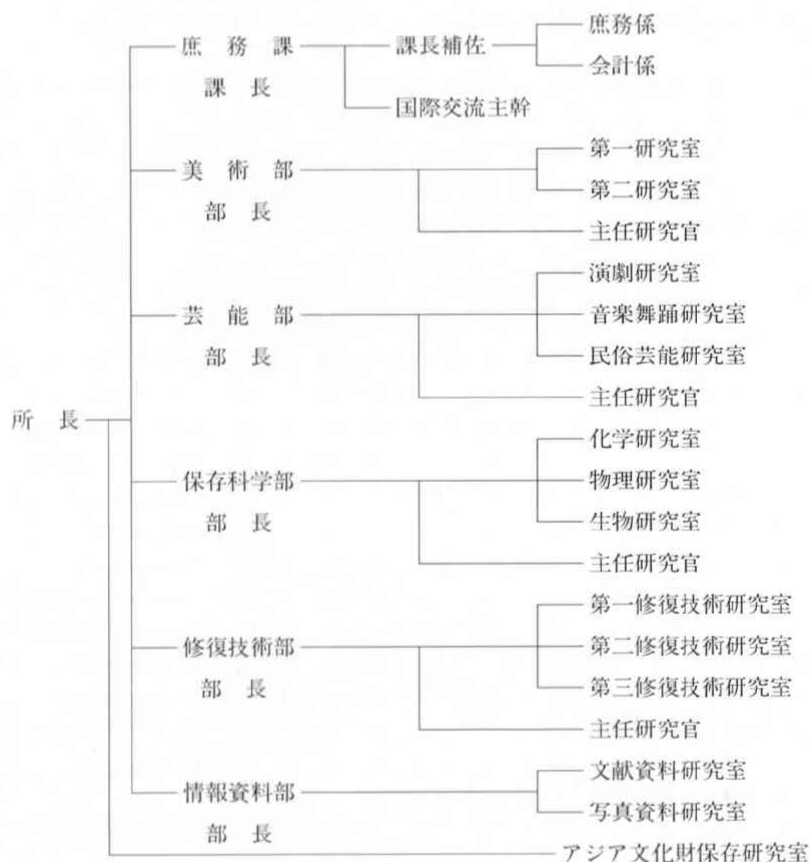
3. 歴代所長 (昭和5年～平成4年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6.11.25～昭和10. 5.31)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6.22～昭和17. 6.28)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6.29～昭和22. 8.15)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8.16～昭和23. 5.10)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5.11～昭和24. 8.30)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8.31～昭和27. 3.31)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28.10.31)
所 長	田 中 一 松	(昭和28.11. 1～昭和40. 3.31)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1)
所 長	伊 藤 延 男	(昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31)
所 長	濱 田 隆	(昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31)
所 長	西 川 杏太郎	(平成 3. 4. 1～現 在)

II. 機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成およびその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1. 機 構



2. 職 員

(平成5年3月30日現在)

所 属		職 名	氏 名	専 門 分 野
所 長	課	所 長	西 川 杏太郎	(美術史)
庶 務		課 長	富 澤 邦 明	
		国際交流主幹	貴 志 辰 夫	
庶 務	係	課 長 補 佐	長谷川 憲 康	
		係 長	大 堀 岳 満	
		係 員	相 澤 かず子	
		事務補佐員	望 月 紀 子	
		"	勝 木 なほ子	
		技能補佐員	堺 良 子	
		調査員(非)	松 原 美智子	
会 計	係	係 長	篠 原 一 夫	(中国絵画史)
		係 員	日 高 信 二	
		事務補佐員	山 田 文 子	
		"	渡 邊 和 子	
美 術	部	労務補佐員	菊 地 廣 吉	
		部 長	鶴 田 武 良	
		主任研究官	佐 藤 道 信	
		"	島 尾 新	
第 一 研 究 室		室 長	中 野 照 男	
		研 究 員	岡 田 健	
		調査員(非)	佐 野 みどり	(日本近代絵画史)
第 二 研 究 室		室 長	三 輪 英 夫	
		研 究 員	山 梨 絵美子	
芸 能	部	部 長	蒲 生 郷 昭	
		主任研究官	鎌 倉 恵 子	
演 劇 研 究 室		室 長	羽 田 昶	
		調査員(非)	高 橋 美 都	
音 楽 舞 踊 研 究 室		室長事務取扱	蒲 生 郷 昭	
		研 究 員	高 桑 いづみ	
		調査員(非)	丸 茂 美恵子	

所 属	職 名	氏 名	専 門 分 野
民俗芸能研究室	室 長	中 村 茂 子	(民俗芸能)
保 存 科 学 部	調 査 員 (非)	山 本 宏 子	(民族音楽)
	部 長	新 井 英 夫	(微生物学)
	主 任 研 究 官	門 倉 武 夫	(環境科学)
	"	石 川 陸 郎	(光学)
化 学 研 究 室	室 長	平 尾 良 光	(無機化学)
物 理 研 究 室	室 長	三 浦 定 俊	(計測工学)
	研 究 員	佐 野 千 絵	(光化学)
生 物 研 究 室	室長事務取扱	新 井 英 夫	
	調 査 員 (非)	山 野 勝 次	(応用昆虫学)
修 復 技 術 部	部 長	三 輪 嘉 六	(考古学)
	主 任 研 究 官	川 野 邊 渉	(高分子化学)
第一修復技術研究室	室 長	中 里 壽 克	(漆芸技法)
第二修復技術研究室	室 長	増 田 勝 彦	(装潢技術)
	研 究 員	尾 立 和 則	(装潢技術)
第三修復技術研究室	室 長	青 木 繁 夫	(考古学)
	技 術 補 佐 員	犬 竹 和	
情 報 資 料 部	部長事務取扱	西 川 杏 太 郎	
文 献 資 料 研 究 室	室 長	米 倉 迪 夫	(日本中世絵画史)
	研 究 員	井 手 誠 之 輔	(東洋絵画史)
	"	勝 木 言 一 郎	(中国絵画史)
写 真 資 料 研 究 室	室 長	鈴 木 廣 之	(日本近世絵画史)
	研 究 員	長 岡 龍 作	(日本彫刻史)
	専 門 職 員	市 川 和 正	(美術写真)
	"	野 久 保 昌 良	(美術写真)
アジア文化財保存研究室	室 長	西 浦 忠 輝	(材質改良学)
	研 究 員	朽 津 信 明	(地質学)
保 存 科 学 部	客 員 研 究 員	山 崎 真 司	(微生物学)
修 復 技 術 部	"	金 子 克 美	(表面化学)
情 報 資 料 部	"	伊 興 田 光 宏	(情報工学)

機構・職員・予算

平成4年度における異動者

所 属	官 職 名	氏 名	異 動 日	異 動 内 容
庶 務 課	課 長	富 澤 邦 明	平 4. 4. 1	転 任
	係 員	日 高 信 二	平 4. 4. 1	転 任
	事務補佐員	渡 邊 和 子	平 4. 4. 1	採 用
	事務補佐員	望 月 紀 子	平 4. 7. 27	採 用
	国際交流主幹	貴 志 辰 夫	平 4. 10. 1	転 任
美 術 部	部 長	鶴 田 武 良	平 4. 4. 1	配 置 換
	室 長	中 野 照 男	平 4. 4. 1	配 置 換
	研 究 員	岡 田 健	平 4. 4. 1	転 任
	主任研究官	島 尾 新	平 4. 7. 1	昇 任
芸 能 部	部 長	蒲 生 郷 昭	平 4. 4. 1	昇 任
	研 究 員	高 桑 いづみ	平 4. 4. 1	採 用
	調査員(非)	山 本 宏 子	平 4. 4. 1	採 用
保存科学部	部 長	新 井 英 夫	平 4. 4. 1	昇 任
修復技術部	研 究 員	尾 立 和 則	平 4. 7. 1	採 用
情報資料部	研 究 員	勝 木 言一郎	平 4. 6. 1	採 用

平成4年度における退職者等

所 属	官 職 名	氏 名	在 所 期 間	備 考
庶 務 課	事務補佐員	内 藤 百合子	平元. 4. 1～平 4. 6. 30	退 職
保存科学部	部 長	新 井 英 夫	昭45. 9. 1～平 5. 3. 31	"
	主任研究官	石 川 陸 郎	昭34. 4. 1～平 5. 3. 31	転 出
情報資料部	専 門 職 員	市 川 和 正	昭30. 3. 1～平 5. 3. 31	退 職
保存科学部	客員研究員	山 崎 真 司	平 3. 4. 1～平 5. 3. 31	"
修復技術部	客員研究員	金 子 克 美	平 2. 4. 1～平 5. 3. 31	"

3. 名誉研究員

氏 名	退 職 時 官 職 名	在 所 期 間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		昭 5. 6.30 ~ 昭27. 8. 1	53.10.18
福 山 敏 男	美 術 部 長	昭23. 5.11 ~ 昭34. 4.15	"
高 田 修	"	昭27.12. 1 ~ 昭44. 3.31	"
登 石 健 三	保 存 科 学 部 長	昭27.10. 1 ~ 昭50. 4. 1	"
岡 畏三郎	美 術 部 長	昭20. 5.15 ~ 昭51. 4. 1	"
中 村 傳三郎	美 術 部 第 二 研 究 室 長	昭22.10. 1 ~ 昭53. 4. 1	"
関 野 克	所 長	昭40. 4. 1 ~ 昭53. 4. 1	"
秋 山 光 和	美 術 部 第 一 研 究 室 長	昭16.10. 1 ~ 昭42. 2. 1	54.10.18
久 野 健	情 報 資 料 部 長	昭20. 5.31 ~ 昭57. 4. 1	57.10.18
川 上 湮	美 術 部 長	昭21. 2.28 ~ 昭57. 4. 1	"
関 千 代	美 術 部 第 二 研 究 室 長	昭18.12.15 ~ 昭58. 4. 1	58.10.18
横 道 萬里雄	芸 能 部 長	昭28. 3.16 ~ 昭51. 4. 1	59.10.18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料研究室長	昭17.11. 3 ~ 昭59. 4. 1	"
江 上 綏	情報資料部主任研究官	昭38. 5.18 ~ 昭59. 3.31	"
田 村 悦 子	美 術 部 主 任 研 究 官	昭22. 6.16 ~ 昭60. 3.31	60.10.18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料研究室長	昭22. 6.27 ~ 昭60. 3.31	"
伊 藤 延 男	所 長	昭53. 4. 1 ~ 昭62. 3.31	62.10.18
柳 澤 孝	美 術 部 長	昭27. 4. 1 ~ 昭62. 3.31	"
宮 次 男	情 報 資 料 部 長	昭30. 9. 1 ~ 昭62. 3.31	"
三 隅 治 雄	芸 能 部 長	昭27.10. 1 ~ 昭63. 3.31	63.10.18
樋 口 清 治	修 復 技 術 部 長	昭37.11. 1 ~ 昭63. 3.31	"
田 實 榮 子	美 術 部 主 任 研 究 官	昭23. 3.31 ~ 平元. 3.31	1.10.18
見 城 敏 子	保存科学部物理研究室長	昭34. 4. 1 ~ 平元. 3.31	"
濱 田 隆	所 長	昭62. 4. 1 ~ 平 4. 3.31	3.10.18
関 口 正 之	美 術 部 長	昭42. 2. 1 ~ 平 3. 3.31	3.10.18
佐 藤 道 子	芸 能 部 長	昭34. 4. 1 ~ 平 4. 3.31	4. 4. 1
馬 淵 久 夫	保 存 科 学 部 長	昭50.10. 1 ~ 平 4. 3.31	4. 4. 1

4. 平成4年度予算

() は補正後を表す

事	項	金 額
		千円
		(342,989)
人件費		339,721
		(191,196)
運営費		201,290
		(32,132)
事業管理		34,559
		(41,223)
一般研究		43,358
		(41,209)
特別研究		43,421
		(2,393)
受託研究		2,393
		(74,242)
文化財保存修復の国際交流事業の促進等		77,559
		(9,900)
施設費		11,000
文部省		
各所修繕		3,969
在外研究員旅費		5,341
	計	(553,395)
		561,321

5. 平成4年度特別研究一覧

事 項	金 額
	千円
文化財の伝統的保存修復材料に関する研究	4,424
伝統芸能（無形文化財）における「鬼」の実証的研究	4,922
アジア文化財保存修復協力センター（仮称）設置のための調査	3,119
有形・無形文化財研究支援データベースシステムの構築に関する調査研究	3,011
鉄器材質の歴史的変遷に関する研究	4,929
博物館等館内における環境制御に関する研究	2,000
文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究	6,016
研究用機器整備（走査型レーザー電子顕微鏡システム）	15,000
計	43,421

6. 平成4年度科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
			千円
重点領域研究	化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究	三浦 定俊	7,800
一般研究(A)	文化財の修理 修復の情報化に関する基礎的研究	三輪 嘉六	3,000
一般研究(B)	出土鉄器の鉛同位体法による原料産地の推定	平尾 良光	800
一般研究(B)	民俗芸能にみられる狂言様式の分類と芸能史的位置づけの研究	中村 茂子	1,100
一般研究(B)	画像と言語—東洋美術史における比較研究—	鈴木 廣之	3,000
一般研究(B)	文化財におよぼす酸性霧の影響に関する研究	門倉 武夫	2,600
奨励研究 A	石器石材の岩石学的研究	朽津 信明	900

機構・職員・予算

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
国際学術研究	タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処理に関する調査	西浦 忠輝	千円 2,500
国際学術研究	科学技術を利用した文化財研究法の開発	西川杏太郎	4,000
国際学術研究	中国砂漠地帯における文化財の劣化現象に関する共同研究	三輪 嘉六	1,900
国際学術研究	文化財保存に関する日独学術交流のための予備的調査研究	三浦 定俊	3,000
特別研究員 奨励費	鉛同位体比法による南周青銅器の原料産地指定	三輪 嘉六	1,000
計			31,600

7. 平成4年度受託研究一覧

研究課題	受入額
	円
ブラズマによる象嵌遺物の保存処理法の開発	191,114
日光山輪王寺所蔵聖遺物箱の保存修復研究	615,230
山形県遊佐町金俣出土木製経筒の保存修復研究	327,250
舟塚古墳出土金属製品の保存修復研究	700,315
中尊寺経蔵露盤羽目板の保存処理に関する研究	799,799
入水三十三観音石仏の保存修復研究	498,729
計	3,132,437

III. 調査研究

中長期研究計画一覧

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
美 術 部	* 美術に関する基礎資料の研究 — 絵巻資料 —	米倉 迪夫	平元.4 ~ 平 6.3
	* 美術に関する基礎資料の研究 — 明治後半期美術資料 —	三輪 英夫	平元.4 ~ 平 6.3
	* 美術に関する基礎資料の研究 — 関東所在水墨画資料 —	島尾 新	平元.4 ~ 平 6.3
	* 美術に関する基礎資料の研究—日本 絵画史年記資料集成15世紀—	鈴木 廣之	平 3.4 ~ 平 6.3
	* 美術における地域性及び社会性の研究	三輪 英夫	平元.4 ~ 平 6.3
	* 近百年來中国絵画史研究	鶴田 武良	平 2.4 ~ 平10.3
	* 中国仏教美術に関する基礎資料の研究	中野 照男	平 4.4 ~ 平 9.3
芸 能 部	* 伝統芸能における「鬼」の実証的研究	蒲生 郷昭	平 4.4 ~ 平 8.3
	* 能楽の芸能学的調査研究	羽田 昶	平 2.4 ~ 平 7.3
	* 絵画資料による近世演劇の研究	鎌倉 恵子	平 3.4 ~ 平 7.3
	* 日本音楽各種目の独自性と相互影響 の研究	蒲生 郷昭	平元.4 ~ 平 6.3
	* 民俗芸能における採り物の研究	中村 茂子	昭61.4 ~ 平 5.3
保存科学部	* 有機質文化財の光による劣化の定量的 評価法の確立	三浦 定俊	平元.4 ~ 平 7.3
	* 特殊環境に置かれた文化財の保存条件 の検討	石川 陸郎	平元.4 ~ 平 9.3
	* フォクシングの保存科学的研究	新井 英夫	平元.4 ~ 平 5.3
	* 古代鉄器材質の歴史的変遷	平尾 良光	平元.4 ~ 平 5.3

調 査 研 究

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
修復技術部	*文化財の伝統的修復材料の研究（第一期）	三輪 嘉六	平元.4 ～平 5.3
	*文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究	三輪 嘉六	平 4.4 ～平 9.3
情報資料部	*美術情報処理システムの研究 ーデータの共有化を中心としてー	西川杏太郎	平元.4 ～平11.3
	*美術史における画像処理技術の応用 に関する基礎的研究	鈴木 廣之	平元.4 ～平 6.3
	*日本・東洋美術史文献データベース の開発	米倉 迪夫	昭63.4 ～平 6.3
ア ジ ア 文化財保存 研 究 室	*アジア諸国における文化財保存に関 する情報の収集	西浦 忠輝	平 3.4 ～平 8.3
	*屋外石造文化財の劣化と保存修復処 置に関する研究	西浦 忠輝	平 3.4 ～平 8.3

1. 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い、かつ、その成果を公表することを活動の目的としている。美術部は二室より構成され、第一研究室は古美術を担当し、第二研究室は近代・現代美術を担当している。

調査研究は各時代にわたり、絵画・彫刻・工芸の各分野について、作品と文献資料との両面から実証的に進め、ともに基礎となる研究資料の作成と整理とにつとめている。その他、現代美術の動向に関する調査と資料収集をも並行して行っている。また当部では、作品に対する科学的な鑑識法を早くから積極的に活用してきた。これも当部の研究活動の特色である。なお情報資料部員との間では、研究や調査の面において緊密な協力体制がとられている。

そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお、研究員それぞれの研究課題と内容は(2)の各論の項に示すとおりである。

調査研究の結果は、機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し、単行の研究報告も随時刊行している。さらに、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために、情報資料部との共同で毎年一回公開学術講座を開催している。また毎年『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行している。

なお美術部は黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所を前身とする。現在も黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、毎週一回木曜の午後にその多くを陳列する黒田記念室を公開している。

第一研究室

江戸時代までの日本美術及び東アジア地域の美術に関する調査研究並びに資料収集、公表を主務とする。また、『美術研究』の編集を担当している。

調査研究

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と、これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを行っている。とくに現代美術に関する調査研究においては、その年度に収集した資料を整理し、その成果を『日本美術年鑑』として毎年刊行している。平成4年度は、平成3年の内容をもった平成4年版を刊行し、引続き平成5年版の編集に着手した。

また、昭和52年度以来実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中心となっていており、平成4年度は北海道立旭川美術館・同帯広美術館で開催した。

(2) 各 論

1. 美術における地域性及び社会性の研究（5年計画の第4年次）

各地域における美術の史的展開には、それぞれの地域のもつ空間的諸特性にもとづく差異が大きく反映されていることは従来指摘されながらも、具体的な問題に即した総合的な説明は試みられていない。本研究は、地域固有の社会性ないし文化的側面における特殊性を重視し、地域間における交流の様態と、その伝播・受容の結果として行われる各地域内での変容の固有な形態を明らかにすることを目的とする。

(1) 中世美術の諸問題

1) 外来の視覚情報の伝播経路とその発展の地域的差異

請来仏画作品に関する基礎資料の収集を継続し、a) 釈迦三尊・十六羅漢図（南宋、山梨・一蓮寺）、b) 仏涅槃図（清、長崎・春徳寺）、c) 仏涅槃図（清、福岡市博物館）について実査を行った。また日本における中国仏画受容の過程を明確にする目的から、高麗仏画、約20点についても、調査を行った。なお、涅槃図に関するこれまでの研究成果を公表した（美術研究354、355）。

2) 芸術家の社会的地位

五山文学に現れた画家イメージについての研究を行い、成果の一部

を公表した（美術研究356）。

3) 15・16世紀における絵画マーケット

建築史、日本史（中・近世職人史・都市史・商業史）の各分野で発表された、番匠の生産形態、雇用の社会機構に関する文献の収集にあたり、番匠と絵師組織との比較検討に備えた。

4) 画像と言語

本年度より二箇年、文部省科学研究費（一般研究B・代表者：鈴木）の助成を得、作品の調査と基礎資料の収集にあたった。

〈島尾、〈情〉鈴木、井手〉

(2) 西欧の美術と制度の移植過程の研究

1) 裸体画問題

近代における西洋美術の移植が、どのように行われ、それが既存の文化や社会とどのように係わったのかを、裸体画問題を中心に研究した。明治期の美術界と社会、道徳倫理、風俗条例などとの検討を中心に、それ以前の裸体（形）表現、中国・韓国の近代美術における裸体画問題とも比較し、その成果を、秋の国際研究集会で発表した。

2) 官設展覧会

フランスのサロンを手本に明治40年に開設された文部省美術展覧会が提示した指針とその影響について、洋画界を中心に考察しその成果を発表した。

3) 日本美術観・日本美術史観の形成

前年にひきつづき、日本・欧米における日本美術観の形成とその相違について、政治（行政）的、経済的、文化的視点から比較検討し、成果の一部を美術部・情報資料部公開学術講座で発表した。

また、日本美術史観がどのように形成されたのかについて、その成立に係わった美術史学を、歴史学や創作活動、古器物保護、美術行政などとの関連の上で検討する作業に、本格的に着手した。

〈三輪、佐藤、山梨〉

調査研究

2. 美術に関する基礎資料の研究

(1) 絵巻資料

梅津次郎氏旧蔵絵巻資料の点検

梅津次郎氏収集絵巻資料の目録リスト「梅津次郎氏撮影作品リスト(稿)」を作成し、『美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用』(科学研究費補助金—総合研究A—研究成果報告書)に発表した。本リストを中核として、他の絵巻関係資料を統合した物語絵巻資料データベースの作成準備に入った。

〈(情)米倉, (調)佐野, (研究協力)村重寧, 大西昌子, 千野香織〉

(2) 関東所在水墨画資料

下記の美術館・博物館に於て、室町水墨画及び関連作品の調査を実施した。

狩野家模本(可翁)	東京国立博物館
所蔵水墨画	松岡美術館
雪村画	茨城県立歴史館
室町水墨画	岡山県立美術館

収集資料については、逐次整理を行い、併せてデータベース化を進めた。

13世紀より16世紀における水墨画家(約60名)の基礎資料の収集と研究史の整理については、前島宗祐・可翁・戯墨・狩野正信について研究会を行った。このうち、前島宗祐については、その成果を公表した(美術研究355)。

〈島尾, (情)井手, (研究協力)河合正朝, 横田忠司, 相沢正彦, 大石利雄, 山下裕二, 小川知二, 大西薫, 救仁郷秀明〉

(3) 近代美術史料

1) 展覧会出品目録の整理

前年度から行った明治美術会、白馬会、日本絵画協会など明治後半期の美術団体出品目録のデータベース化を完了。これと並行して、コンピュータ処理を経ない白馬会出品目録の原典資料を、復刻した。(美術研究354, 355)

2) 美術史学関係資料の収集

a) 日本美術史通史の刊行本の収集

日本美術史（および東洋美術史若干）を通史的に記述した刊行本（黒田鵬心『日本美術史読本』ほか）を収集した。

b) 海外との人物交流調査のための辞典類収集

渡欧した日本人、来日した外国人などに関する広範な調査を可能とするため、『海外渡航者総覧』『来日西洋人名辞典』『国際人事典』『日本外交史辞典』『明治人名辞典』ほかの収集につとめた。

〈三輪、佐藤、山梨〉

(4) 日本絵画史年記資料集成十五世紀

本研究は、すでに刊行された『日本絵画史年記資料集成十世紀～十四世紀』（1984）を継続するものである。

源豊宗『日本美術年表』・集英社版『原色日本美術年表』に掲出された1401～1500年の記事の中から絵画に関する項目約140件を抜粋した。

落款、奥書、賛文、銘記などに年紀をもつ例の他、作者、賛者の没年等から制作年代の推定できる例も参考資料として同様に抜粋した。本年度は、抜粋項目に取り上げた作例1点ごとについて、論文・論説・紹介など、内容と図版の有無を基準にして主要参考文献の収集を継続した。

〈情〉鈴木〉

3. 中国仏教美術に関する基礎資料の研究（5年計画の第1年次）

日本の仏教美術を研究するには、その源流である中国の仏教美術を理解することが重要である。従来、中国仏教美術の研究は、日本文化に大きな影響を与えた日本伝来作品を中心に進められてきたが、近年は、中国においてさまざまな仏教遺跡の整備、調査、研究が進められ、新たな資料が積極的に公開されたのにもなって新しい転機を迎えつつある。本研究は、これら伝来品および新資料を対象として、基礎的な資料を収集し、中国仏教美術の体系を見直すとともに、その特質を、図像、様式、技法の面から明らかにすることを目的とする。

(1) 基礎資料の収集

日本に伝来した中国仏教美術の作品のうち、その制作年次、制作地、

調査研究

制作の発願者、画師などの明らかな作品を基準作として収集し、またそれらの作品の研究史を整理して、基本的な問題点を確認する。本年は、中国仏教美術のほか、それらと不可分の関係にある朝鮮の高麗時代の仏教美術についても調査を行った。また、アメリカ合衆国フィラデルフィア美術館所蔵の宋代木彫像について基礎データを収集した。

(2) 中国仏教美術の受容に関する研究

中国仏教美術は、本来どのような信仰、社会状況のなかで生み出されたものかをまず明らかにし、それらが周辺地域に受容された際に、どのような枠組みのなかで受入れられたのか、またどのようにして変容したかを考察する。本年度は、南宋時代の陸信忠筆涅槃図（奈良国立博物館蔵）の制作背景に注目し、13世紀から18世紀までの中国の涅槃図の展開を明らかにした（美術研究354, 355）。また、平安時代初期の木彫像における「様」と「素材」の意識を中国の作例および文献との比較を通して考察した。

この研究は、平成3年度に「来迎を中心とする浄土教美術の研究」のテーマのもとに浄土教美術についての考察を行ったものを発展させ、他の仏教美術についても同様の考察を行おうとするものである。

(3) 中国仏教美術の様式変遷に関する研究

近年公開された新資料を博捜し、各時代の絵画、彫刻の様式の特徴を明らかにする。本年度は、如来像の着衣表現を通して、中国仏教美術の独自の表現上の展開を考察した（美術研究356）。また、洛陽近郊の鞏県石窟の初唐様式を考察した。〈中野、岡田、(情)井手、長岡、勝木〉

4. 近百年中国絵画史研究

20世紀初期の中国における西洋画の受容を中心に研究を行い、その成果の一部を第16回国際研究集会、'93日中美術シンポジウムで発表した。また「近百年來中国美術年表」の作成を継続した。北京・中国画研究院で現代中国絵画の調査を行った。〈鶴田〉

2. 芸 能 部

(1) 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能に資するために必要な基礎研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室内の三室によって構成されている。芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法およびその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備および記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。また、研究の成果は刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

平成4年度は、前年度で終了した特別研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」の成果を「芸能の科学21」において公表した。また、新たな特別研究「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」(4年計画)の第1年次にあたり、資料収集、記録作成、実地調査を行い、研究会を開催した。

演劇研究室

日本古典演劇について芸能学的に調査・研究を行い、また、これら諸芸能の周辺にあって、伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

平成4年度は、個人研究として「絵画資料による近世演劇の研究」「寺社行事の研究」、共同研究として「能楽の芸能学的調査研究」を行い、また共同研究「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」に参加した。なお、過去20年にわたって調査・記録を行った「寺院行事の研究」の成果である録音資料の永久保存のためのPCMダビングの作業を継続している。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について、芸能学的・音楽学的な調査研究を行い、これら伝統芸能の成立に深い関係をもつ周辺分野についても、調査研究を進めている。

平成4年度は、個人研究として、「日本音楽各種目の独自性と相互影響の研

調査研究

究」「日本舞踊における技法の相互影響の研究」を行ったほか、共同研究「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」「能楽の芸能学的調査研究」に参加した。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし、それらの保存・継承に資するために必要な研究を行っている。

平成4年度は、個人研究として「民俗芸能における採り物の研究」「民俗芸能と社会・経済構造との関係」を行ったほか、共同研究「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」「能楽の芸能学的調査研究」に参加した。

(2) 各 論

1. 伝統芸能における「鬼」の実証的研究（4年計画の第1年次）

日本の民俗行事や宗教行事、能・狂言・歌舞伎などの伝統芸能には、「鬼」がいろいろに形や性格を変えて登場する。本研究は、「鬼」の多面的な性格、芸能的表現の多様性、歴史的変遷を総合的に把握し、解明することを目的とする。本年度はその初年次で、下記の調査・研究を行った。

- (1) 研究会開催：味方健氏を招いて「大和猿楽に見る〈鬼〉」のテーマで開催。同氏の講義を受けた後、質疑応答を行った。他に部員のみによる研究会を2回行った。
- (2) 芸能技法の記録：喜多流能楽師の友枝昭世氏および和泉流狂言師の野村万之丞氏に実演を依頼して、部内視聴室および舞台上、謡・せりふ・所作に見られる鬼の技法の録音・録画を行った。
- (3) 実地調査：神戸市の長田神社で行われた追儺式を調査し、記録した。
- (4) 個別研究：かつては囃子事〔早笛〕でハタラキを見せる演出が行われていたこと、〔早笛〕を他の囃子事に転用していたことを実証した。

2. 能楽の芸能学的調査研究（5年計画の第3年次）

舞台芸術としての能楽の技法を多角的に捉えることを目的とし、芸能部全員で取り組む総合研究である。今年度は下記の調査研究を行った。

- (1) 能本の構造と演出の研究：前年度に引き続き、復曲活動の実際面への

参画と検討を通して、番外曲の構造と演出について考察した。〈羽田〉

- (2) 能管と一節切の交流；能管と一節切の役割差，楽曲や伝書の交流を明らかにし，室町時代の音律感を考察した。成果は平成6年発行予定の「小島美子退官記念論文集」に公表する。〈高桑〉
- (3) 能の音楽的研究；初期の文献に見られる理論用語の意味を，他種目での用法を参照しながら検討した。〈蒲生〉
- (4) 民俗芸能にみる狂言様式の研究；各地に様々な様式で伝承されている郷土狂言の分類を行っている。〈中村〉
- (5) 近世演劇と能の関係；劇書類の本文と挿絵から舞台構造の推移とそれに伴う演出の変化を検討中である。〈鎌倉〉

3. 絵画資料による近世演劇の研究（3年計画の第3年次）

特に歌舞伎のからくり注目して，絵入狂言本・評判記の本文および挿絵を比較検討し，からくりの実態，効果などについて考察した。〈鎌倉〉

4. 日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究（5年計画の第4年次）

基本的な理論用語から，各種目に共用されるものをいくつか選んで，概念や用語史を考察したほか，所外の研究者をまじえての，長唄正本研究を継続した。また，雅楽の唱歌について古い時代の資料を収集し，絵画資料から能にいたる鼓の変遷について研究を行った。鼓の変遷については成果を学燈社刊「国文学」12月号に公表した。〈蒲生・高桑〉

5. 民俗芸能における採り物の研究（8年計画の第8年次）

扇・武器を取り上げて考察した。扇については成果の一部を芸能部公開学術講座で公表した。また，武器については基礎資料の作成を行った。〈中村〉

6. 舞楽系芸能を伴う寺社行事の研究

外来系の舞楽が各地の宗教行事に受容された例として，本年は新潟県能生，富山県下村，静岡県森町の祭礼を調査した。四天王寺舞楽との関わりを中心に，その一部を「芸能の科学 21」で公表した。〈高橋〉

7. 日本舞踊における技法の相互影響の研究

近年に復活上演された舞踊作品，清元「うかれ坊主」について，技法の変遷や伝承の背景を考慮しつつ，その原曲の振りを考察した。成果は，平

調査研究

成5年度発行の「舞踊学」で公表する。〈丸茂〉

8. 民俗芸能と社会・経済構造との関係

沖縄県読谷村の集団太鼓舞エイサーを取りあげ、社会的・経済的転換期に民俗芸能がどのように対応してきたかについて、実地調査に基づく考察を試みた。成果の一部を「芸能の科学 21」で公表した。〈山本〉

3. 保存科学部

(1) 概要

文化財の材質・構造・技法および劣化機構の科学的研究ならびに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行い、これらを基盤として文化財保存の技術開発に関する研究を行っている。言い換えれば、文化財の自然科学的研究、文化財を資料とする科学技術史的研究、文化財の保存のための科学技術の応用研究の3方面である。研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究室の3室からなり、研究成果は修復技術部と共同編集の機関誌「保存科学」により公表され、文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。

化学研究室

化学研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を化学的手法を用いて調査・研究している。X線分析法、光学的分析法、質量分析法などを用い、主として金属文化財に関する劣化、保存対策、材料産地の推定などの研究を進めている。また、文化財を取り巻く環境からの大気汚染、酸性雨などの影響について汚染度の測定、影響評価法の研究を行っている。

物理研究室

物理研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を物理学的手法を用いて調査・研究している。文化財の材質、構造の調査方法として γ 線・X線・赤外線などを用いている。また展示、収蔵、梱包などの文化財を保存する環境の評価と劣化防止の方法について研究を行っている。

生物研究室

生物研究室では文化財の保存に関する問題点を生物学的な見地から調査・研究している。文化財の生物による劣化、すなわち微生物や昆虫等による被害の実態を調査して、これらの加害生物がおよぼす劣化の原因と機構を明らかにし、加害生物の防除法の研究と開発を行っている。

(2) 各 論

1. 文化財の伝統的保存修復材料に関する研究（4年計画の第4年次：修復技術部と共同）

35頁，修復技術部の項参照。

2. 鉄器材質の歴史的変遷に関する研究（3年計画の第2年次）

本年度は鉄器原料の産地を推定することを目的として、鉛同位体比法が応用できるかどうかについて基礎的研究を行った。

歴史時代の鉄資料中における鉛濃度は銅製品の場合よりかなり低く、中世の鉄器で約0.01ppm程度であることが分かった。これは銅製資料における鉛濃度と比較して、約1/10000という量である。これらの資料について鉛同位体比の測定法を確立した。この方法を用いて古墳出土の鉄製鉄、寺院建築に用いられた鉄製釘材などを試料として幾つかの測定値を得ることができた。今後この方法を用いて各種試料を分析することにより、鉄の産地に関する情報を集めようとしている。＜平尾＞

3. 文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究（3年計画の第1年次：修復技術部と共同）

35頁，修復技術部の項参照。

4. 有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の研究（中長期計画課題：6年計画の第4年次）

昨年度に引続き、劣化促進試料を用いた基礎研究と、経年劣化裂を用いた応用研究を行っている。紫外線で強制劣化させた絹についてESRで状態分析を行い、有機ラジカル量と劣化促進時間との相関を確認した。紫外線量に比例して劣化が促進されるかどうかについては、湿度条件を一定に

調査研究

する必要があることが明らかになった。模擬的に行った水中での紫外線照射は、着色を強く進ませることが明らかになった。また、絹を構成する各種アミノ酸ポリマーに対して光劣化促進を行い、高分子たんぱく質である絹のどの部位が劣化を受けやすいのか検討している。あわせて、アミノ酸分析も行った。経年劣化裂を用いた応用研究では、同一裂でも試料採取場所によりデータのばらつきが大きいものもあり、表面の付着物の扱いについての問題点が明らかになった。＜佐野、三浦＞

5. 特殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討（中長期計画課題：8年計画の第4年次）

(1) 展示収蔵施設内の「アルカリ因子」の同定と文化財材質への検討

昨年に引き続き、「アルカリ因子」が文化財に与える影響について検討した。本年度は特に、コンクリートが生乾きの状態の時に確実に存在するアンモニアが、文化財材質に与える影響について検討した。

1) アンモニアガスが文化財材質に与える影響

銅製品に影響が出ると考えられたため、銅系の顔料（緑青・焼緑青等）、銅板についてアンモニアガス雰囲気下、コンクリートブロックを設置したデシケーター中、および実施設内で曝露を行った。

銅系の顔料（緑青・焼緑青等）、銅板をアンモニアガス雰囲気下に置いたところ青みが強くなり、変色する可能性が示唆された。ESRで観測したところ、緑青はアンモニアガスに曝露後、銅のまわりの電子状態が変わり、数種類のシグナルが認められた。信号の同定については、検討中である。また、同じく銅系の顔料を用いて、デシケーター中にコンクリートブロックを設置して、曝露実験を行っている。＜佐野＞

2) アンモニア濃度判定紙の開発研究

実施設のような高湿度で希薄なアンモニアを含むような空間を模擬的に作るのは難しい。本年度は、実験に提供できる実施設がなかったため、行えなかった。

アマニ油含浸紙へのアンモニアガスの影響を検討し、コンクリート雰囲気中と同じ方向への着色を観察した。変色速度等について検討中である。＜佐野＞

(2) 都心部およびその周辺部における酸性物質の文化財への影響

環境汚染が文化財におよぼす影響の評価を検討する目的で、環境中の汚染因子の測定およびテストピースの曝露試験を継続中である。本年度は実験地点として鎌倉市高德院および京都国立博物館の2ヵ所を追加し、大理石テストピースの曝露試験と汚染空気中の NO_2 、 SO_2 、ミストおよび雨水中の Cl^- 、 NO_3^- 、 SO_4^{2-} 濃度と今年度から雨水中の微量浮遊物質「粉じん」量も併せて測定を開始した。

前年度の曝露実験に用いた大理石テストピースでは6ヵ月経過ころまでは屋外で重量減と降雨量に相関がみられたが、その後試料間のばらつきが大きくなる傾向にあり、試料面の不均一さが観察された。外国産の大理石が国産より均一性であるとの情報から現在この試料について実験を継続している。なお、テストピースは約12ヵ月経過では屋外曝露で重量減、屋内では重量増の傾向が確認されている。酸性雨の調査では全降雨の初期1 mmのみ分取する方法と、1～8 mmまで分取する方法があり、両採取法を比較した結果、降雨状況により組成の違いがあり、酸性雨による影響を検討する際は全降雨についての分析データが重要であると判断された。〈門倉〉

6. フォクシングの生物化学的分解(中長期計画課題：4年計画の最終年次)

平成4年度(最終年次)は、これまでの研究結果に基づいてグルコースと γ -アミノ酪酸を加熱処理して合成したメラノイジンを供試して、フォクシング分解菌の検索を行った。

木材腐朽菌 132株、放線菌 119菌株、コウジ菌 2菌株の計253菌株について合成メラノイジン脱色能を検索した。

第1次検索の結果、合成メラノイジン含有培地を比較的良好に退色させる菌株が、119菌株中7菌株に認められ、供試したコウジ菌には認められなかった。8菌株について、第2次検索を実施した結果、*Polyporus hypobrunnea*の1株が基本培地で82.0%、PD培地で48.5%という高い脱色率を示し、それに次いで*Coliorus versicolor*が高い脱色率を示した。

上清の粗酵素液と菌体による脱色効果の実験によって、*Polyporus hypobrunnea*の菌体が23.3%と最も高い脱色率を示し、粗酵素液の脱色効果は

調査研究

微弱であった。このことは、本菌株の脱色酵素が菌体の膜や細胞壁に結合して存在することを示唆していた。

以上の保存科学的研究は、フォクシングの修復に生物化学的方法の導入の可能性を示した。＜新井＞

7. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 鉛同位体比を利用した銅製品、青銅製品の材料産地推定

文化庁、東京国立博物館、各県や市町村教育委員会・発掘事務所・埋蔵文化財センターなどから、各種の青銅製品、発掘・出土銅製品、伝世の仏像などに関して鉛同位体比測定依頼がある。これらを測定し、材料産地の推定を行った。一般研究として今年度測定試料数は約100点。

＜平尾＞

(2) 蛍光X線分析法を利用した研究

文化庁、東京国立博物館、各県や市町村教育委員会・発掘事務所・埋蔵文化財センターなどから、各種の青銅製品、発掘・出土銅製品、伝世の仏像などに関して蛍光X線分析の依頼がある。これらを測定し、材料の化学組成を報告した。一般研究での今年度試料数は約150点。＜平尾＞

(3) X線回折分析法を利用した研究

1) 西洋美術館の野外に置かれた銅製彫刻の錆に関する調査を続行中。

試料数約40点。＜平尾＞

2) 静岡市教育委員会からの依頼で発掘銅製品に発生した錆の種類について調査した。アタカマイトであることが判明し、速やかに保存処理することを提言した。試料数約10点。＜平尾＞

(4) 非破壊式蛍光X線、X線回折法による調査

江田船山古墳出土銀象嵌大刀の赤色部の調査他考古遺物、絵画、彫刻等約15点について腐食劣化生成物、顔料の同定を行った。＜門倉＞

(5) X線マイクロアナライザーを利用した研究

寛永寺清水堂修復に伴い、薄片試料を用いて赤色顔料の在来仕様および技法の調査を行った。＜佐野＞

(6) 赤外線、エミシオグラフィ及びX線透視撮影による研究

下記の作品の撮影と調査を行った。＜三浦、石川＞

木製文化財

作品名	所蔵者（依頼者）
大日如来座像	円成寺（文化庁）
無量寺（五仏の内）頭部	東寺（文化庁）
正平版論語板木	東十寺（文化庁）
五山版板木（法語）	向嶽寺（文化庁）

金属文化財

作品名	所蔵者（依頼者）
法隆寺献納宝物水瓶（10口）	東京国立博物館
ロダン「カレーの市民」	国立西洋美術館

絵画・顔料

作品名	所蔵者（依頼者）
法隆寺献納宝物「勝鬘経」	東京国立博物館
モジリアニ「ニースの歌姫」	ニューオータニ美術館
ユトリロ「サクレクール寺院」	同
セザンヌ「自画像」	ブリヂストン美術館
セザンヌ「静物」	同
セザンヌ「サント・ヴィクトワール山とシャトーノワール」	同
藤島武二「半裸婦人像」	同

(7) フーリエ変換赤外分光計を利用した研究

寛永寺清水堂修復の際、黒色顔料の在来仕様調査を行い、漆塗膜と同定した。＜佐野＞

(8) 材質の劣化に関する研究

1) 金属文化財

京都国立博物館中庭にあるロダンの彫刻「考える人」に発生した緑青錆の調査を行った。＜門倉＞

2) 石造文化財

昨年に引き続いて、箱根町の依頼により元箱根石仏群の劣化状況の調査を行い、六道地藏周辺の気象観測を行っている。日の雨量が100

調査研究

mm を越える日も多く、たいへん湿潤な環境である。また福島県小高町薬師堂石仏も継続して調査した。堂内の湿度は依然として高いが、石仏表面の濡れは少なくなってきた。

この他、鹿児島県始良郡隼人町にある国指定史跡「隼人塚」の劣化状況について、町の依頼により調査を行った。〈三浦〉

8. 環境に関する調査研究

(1) 温度・湿度・水分

次の地点で、温度・湿度などの気象観測を継続して行っている。

〈三浦〉

史跡等の名称	観測項目	観測開始時期
小高町薬師堂石仏	温湿度・表面温度	1985年12月
中尊寺金色堂	温湿度・変位	1986年 3月
同 讃衡藏	温湿度	1991年 6月
三殿台遺跡住居跡	温湿度・表面温度・日照	1989年 4月
元箱根石仏群	温湿度・表面温度・日照	
	風向・風速・雨量	1991年 6月

(2) 土中環境に関する研究

史跡虎塚古墳（勝田市）彩色壁画保存対策に関わり壁画公開および川崎市指定馬絹古墳石室内保存工事に伴う再発掘、工事中における環境整備を行った。〈門倉〉

(3) 調査・指導

展示・収蔵環境

下記の博物館、美術館、資料館などの館内環境について、温湿度、照明、汚染因子等、適切な条件下で作品の収蔵・展示ができるよう指導した。〈石川、三浦、佐野〉

所在地	館名
福島県	郡山市立美術館
群馬県	東毛学習文化センター
東京都	麻布美術工芸館
	三の丸尚蔵館

	国立国会図書館
	国立西洋美術館
	セントラル美術館
	東武美術館
	新東京都美術館（仮称）
埼玉県	入間市郷土博物館
	浦和市郷土博物館
愛知県	田原町博物館
	高浜市博物館
	秀吉・清正記念館
三重県	四日市市立博物館
滋賀県	比叡山国宝館
	滋賀県立安土城考古博物館
大阪府	吹田市立博物館
兵庫県	尼崎市歴史博物館
	神戸市立小磯良平記念館
広島県	熊野町筆の里博物館
香川県	牟礼町博物館
徳島県	徳島城博物館
高知県	高知県立美術館
佐賀県	唐津市文化交流プラザ
	佐賀県立名護屋城博物館
熊本県	玉名市博物館
宮崎県	西都市歴史館

9. 生物被害の調査と対策

(1) 水漬け展示物の防藻対策

博物館で展示中の水漬け漆器には、緑藻が発生する。この防藻対策を検討した。＜新井＞

(2) 姫路城漆喰壁の黒変現象の調査

姫路城漆喰壁の黒変現象は、クラドスポリウム菌に起因することが判

調査研究

明した。その対策として、無機系撥水剤を壁面への展着剤とし、これに防黴剤を組合せた場合の防除効果を検討した。〈新井〉

4. 修復技術部

(1) 概要

文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究、応用及びその公表を主務としている。研究の対象は美術工芸品、建造物、考古資料、民俗資料などの有形文化財をはじめとした、文化財のすべてを含んでいる。

組織としては、文化財を構成する主材料に合わせて3研究室からなっている。

第一修復技術研究室

工芸品、建造物など木材および漆を主な材質とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究を行い、その成果の公表を行っている。

第二修復技術研究室

絵画、書籍、染織品など紙・繊維または、皮革を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその成果の公表を行っている。

第三修復技術研究室

建造物、考古資料、美術工芸品など金属、石材、その他無機材質を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその成果の公表を行っている。

科学的な修復方法の開発は、合成樹脂を利用した修復やプラズマ法による保存処理などに大きな成果をあげている。

文化財の修復に関する研究は、文化財そのものの材質、製作技法に関する科学研究を通して、相互の関係を明らかにすることが重要な課題である。

また、酸性雨等の環境汚染によって、屋外にある不動産文化財が大きな被

害を受けている現状から文化財を保存するために中長期研究として「屋外にある文化財の劣化過程の調査と修復方法の研究」をテーマとして研究を行ってきた。その緊急性から本年度より特別研究「文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究」として研究体制を拡充編成替えして開始した。

(2) 各 論

1. 文化財の伝統的保存修復材料に関する研究（4年計画の第4年次：保存科学部と共同）

(1) 修復材料

a) 補絹用絹

オゾン劣化による絹より、紫外線照射による絹が自然劣化に近いことが、彩色テストからも、SEM観察からも判ってきたので、修理工房内で人工劣化が出来るための装置を試作し、実験的に劣化を行っている。＜川野辺、佐野＞

b) 材料に関する調査

低温薄膜脱水法によって生漆中の酵素とゴム質を微粒化した精製漆を、従来の精製漆と比較するため、手板を製作し耐候性試験を行っている。約8か月を経過したが、従来の精製漆は下地を露出し、低温薄膜脱水法で製作した精製漆は、光沢が少なくなる程度にとどまっている。どの程度の耐候性を示すか実験を継続中である。＜中里＞

2. 文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究（3年計画の第1年次：保存科学部と共同）（一般研究「屋外文化財の劣化過程の調査と修復法の開発」の拡充）

環境汚染によって文化財が影響を受けているが、従来の研究の他に、関東の文化財集中地区である鎌倉市に研究フィールドを設定して調査研究を行っている。鎌倉大仏に気象条件や酸性雨などの観測ステーションを設け劣化因子の測定を行うとともに大仏と類似した組成をもつ銅板等の暴露試験を開始した。また同じ銅板などを使用して劣化促進試験（酸性雨試験機、塩乾湿複合サイクル試験機、CAS試験など）を行っている。＜青木、門倉、三浦＞

調査研究

3. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

漆

(1) 正倉院伎楽面の調査

脱乾漆及び木製伎楽面37面の破損状態調査を行い、修復方法について検討した。＜中里＞

(2) 漆芸品の調査

重要文化財秋野蒔絵手箱（遠山美術館）、蒔絵菩薩立像（東京国立博物館）、重要文化財木造菩薩座像（白毫寺）の技法調査を行った。＜中里＞

4. 材質の劣化に関する研究

染織文化財・染料

(1) 鉄タンニンによる繊維製品の劣化

脆弱化が速い黒染め染織品の修復法を確立するため、染色工程中の金属類の移動を追跡しながら、黒染めの伝統技法の解明をしている。分析により媒染剤の金属含有量が少ないことが判ったので、絹繊維に染料が染着している状態の時間的推移を追跡した。本研究は絹の劣化に関する研究として保存科学部と共同研究している。また、文化財保護振興財団の研究補助金により、外部の研究者とも共同して行っている。＜増田、川野辺＞

5. 文化財修復技術

(1) 木造文化財

a) 建造物彩色の剥落止め

近世・近代の木造建造物内部彩色の剥落止めを垂直面や天井面で施工するための材料・手法の開発研究を開始した。鳥取県大神山神社、大分県願成院、福島県飯野八幡宮などで実施条件の検討を行っている。＜川野邊＞

b) 特殊環境下の塗装材料・施工方法

重要文化財厳島神社大鳥居の修復仕様の検討を行っている。修復対象が海中に立地するために、海水中で施工可能な材料等特殊な材料と施工方法の開発が必要とされている。＜川野邊＞

(2) 漆文化財

美術工芸品の伝統技法の調査

a) 漆塗建造物の調査

高台寺霊屋奥の間の漆塗須弥壇は破損調査を終え京都府に報告した仕様に従って京都芸術大学の教官が修復を実施した。＜中里＞

b) 漆文化財の技法に関する研究

8世紀の脱乾漆の中に、漆ではなく糊を接着剤とする技法を示唆する作例を調査した。その後漆による方法と糊による方法で伎楽面を試作検討した。その結果少なくとも糊による製作が可能ながことが明らかに出来た。＜中里＞

(3) 紙質文化財

a) 風邪引き紙の回復法

斑点状に水を吸収してしまう紙を「風邪引き紙」と称するが、その紙の回復法を発見したので、回復法確定のために様々な条件で回復実験をしている。＜増田＞

(4) 金属文化財

ブラズマを用いた鍍の安定化処理については引続き研究を行っているが、特に象嵌遺物の処理に対して応用することを中心に研究をおこなっている。群馬県藤岡市平井1号墳出土円頭柄頭の処理を実施した。

国宝江田船山古墳出土象嵌大刀の保存処理を行った。象嵌が腐食により黒く変色してしまい銘文が判読出来ない状態であったものを、銘文調査とともにクリーニングを行った。＜青木＞

(5) 遺跡・遺構の保存修復

発掘遺構保存のため開発した樹脂の実験を横浜市三殿台遺跡で行ってきたが土壌含水率を土壌の収縮限界内にコントロールすることが可能になった。この樹脂を使用して三殿台遺跡の覆屋内遺構約500平方メートルにたいして保存処理を実施した。＜青木＞

土壌強化用樹脂を開発して佐賀県吉野里遺跡で遺構土壌を強化する実験を行った。かなり浸透性の良い樹脂であるが、地表面から2センチ程度しか浸透しなかった。吉野里遺跡の凍上条件から見て、最低10センチ程度樹脂が浸透して土壌を強化しないと冬季に崩壊してしまうことがわ

調査研究

かり、さらに浸透性の良い樹脂を開発する必要がある。〈青木〉

覆屋によって保存されている文化財の保存上の問題を把握するための調査を行っているが、本年度は埼玉県を対象として悉皆調査を行った。

〈青木〉

6. 調査指導

(1) 火災による損傷を受けた文書の救出

平成4年12月30日草加市内の旧家の火災によって、焼損と水害を受けた文書の緊急救出方法の助言と指示を行った。早急にプラスチック袋に1冊ずつ収納し、冷凍倉庫会社に依頼すること、真空乾燥装置のある埼玉県埋蔵文化財センターに処置を依頼するために県の担当部署と連絡することなど、を指示した。

埋蔵文化財センターでは、通常業務に使用している真空乾燥タンクで少量ずつ処置を続けている。〈増田〉

7. 受託研究

(1) 舟塚古墳出土金属遺物の保存修復研究（茨城県歴史館）

本年度は、主として銅製品の保存修復処置研究を行った。

（3年計画第3年次）

〈保存修復〉

- ・超音波メスやEDTAを使用して化学的な錆のクリーニング
- ・脱塩処理
- ・ベンゾトリアゾールによる銅錆の安定化処理
- ・インクララック樹脂による減圧含浸強化
- ・合成樹脂による破片の接着復元

(2) ブラズマによる象嵌遺物の保存処理法の開発（群馬県藤岡市）

象嵌遺物には、国宝埼玉県稲荷山古墳出土「辛亥銘鉄剣」のように重要なものが多い。グラインダーなどで研ぎ出す従来の方法では、注意してそれを行っても、表面を痛めてしまうことがあり、このことによって製作技法をわからなくしてしてしまうことがある。

ブラズマ処理を行うことによって象嵌に傷をつけずに保存処理を行うことが出来る。

〈保存処理〉

- ・ X線撮影により象嵌の確認
- ・ ブラズマ処理（水素400，酸素400，アルゴン200，処理時間1時間）
- ・ 実体顕微鏡下でメスなどを使用して錆をはがす。
- ・ 樹脂を減圧含浸して強化する

(3) 山形県遊佐町金俣出土木製経筒の保存修復研究（山形県遊佐町）

桐製の経筒で出土例の少ない珍しいものである。一木をくりぬき中央で逆印籠蓋にし内部に経巻が納められている。表面には和紙が漆で貼られている。

X線撮影を行い内部の経巻と経筒の構造を確認後、逆印籠部分をダイヤモンドカッターを使用して切断して経巻を取り出した。経筒は樹脂を含浸して強化し、剥がれそうな和紙部分は挿変化した樹脂を開発して剥落止を行った。

(4) 日光山輪王寺所蔵聖遺物箱の保存修復研究（輪王寺）

徳川家光の墓所である日光山輪王寺大猷院に献納されたもので、グラビール技法を駆使して四季を表わしたガラス飾り，象牙，銀製浮彫など華麗な装飾が施されている。

銀板のクリーニングを行い，樹脂と角粉等を使用して擬象牙を製作して保存処理を行った。

(5) 中尊寺経蔵露盤羽目板の保存処置に関する研究

中尊寺経蔵の露盤羽目板として中尊寺に伝えられた羽目板は4枚あり，材質は栗である。法量は各板ともほぼ同寸で，長さ1,040mm，巾310mm，板厚43mm，である。各板の表には香様を二つ並べる。東面板の香様には迦陵頻伽が半肉彫りで彫り出され，他の三枚には同じく香様内に孔雀文を彫り出している。各板の裏面には縦二本の溝を彫りくぼめる。これは板を裏から固定した束のためのものであろう。

4枚の板の表面には黒色顔料を全面に塗っているが，剥落がひどくなり欠失している。ただこの顔料は板の風蝕にも入り込んでおり，後補と思われる。

板の破損の程度は4枚とも一様ではない。特に西面の下縁右に20×10

調査研究

cm程の欠失があり、東面には右側から中央に向かって大きな木割れがある。各板の表面は風蝕がひどく、また下縁では腐朽がひどい。

修復処置はまず各板の黒色顔料をバラロイド B72・10%（トルエン溶液）で剥落止めを行い、西面の欠失部には木目の似た橋材を削り出して当てがい、アクリル樹脂で点接着し補填した。東面の木割れには芯にバルサ材の薄材を挿入しアクリル樹脂で接着した。これらの部分にはミルボンドに木粉を混和したもので整形を行なった。また各板の文様欠失部等は同じくミルボンド木粉混和材で整形した。

今後の保存方法として露盤形の木枠を別途に製作し、それに嵌め込みそのまま陳列もできるようにした。

5. 情報資料部

(1) 概要

情報資料部では、従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成、収集、整理、保管、閲覧等の業務を充実発展させ、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的としている。

当部所管の諸資料は美術部創設以来内外の研究者の利用に供され、文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ、学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を図るため、データの共有化を中心とする美術情報処理システムの研究、画像処理技術の応用、文献データベースの開発などを行っている。

当部研究員は、上記業務を行うとともに日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っている。調査研究活動の成果は『美術研究』ほか学会誌、美術部と共催の公開学術講座等で発表している。

当部は、文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係

の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。各年分の文献目録は『日本美術年鑑』に掲載し、一定期間ごとに総合・増補し『日本・東洋古美術文献目録』として刊行している。現在、昭和41年～60年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作成・収集・整理・保管・閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実につとめている。また、これに並行して、美術研究所創立以来蓄積された写真原板の転写を昨年度に引続き実施するとともに、美術史研究への画像処理技術の応用及び画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

(2) 各 論

1. 美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—(10年計画第4年次)

(1) 共有データの生産・蓄積・利用環境の検討

- 1) データベース容量増に対処し、利用効率を引上げるため、ローカルエリアネットワークの端末接続台数を増加するとともに、デジタル電話回線を設置して学術情報センターとのオンライン接続を実現するなどシステム全体の拡充を図った。また、商業ネットワークを通じ、研究者相互のデータの交換実験を行った。
- 2) 現在進行中の文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステム計画については、前年度に引続いて協議に参加した。
- 3) 全国の研究者の参加を求め、オフラインによるデータの共有システムに関する研究協議会を開催した。①研究者間の共有化の原則、②システム化実現のための諸条件、③美術史学会の対応を含めた具体的方策、④作成されたデータの有効な活用方法などについて、研究報告と討論を行った。また、佐賀県立美術館・博物館に於いて実際のデータを利用した研修会を行い、データ共有化に向けたモデルケースづくりを試みた。

調査研究

(2) システム構築のための基礎的実験

写真資料、文献資料、テキストの各データフィールドの検索システム構築のための基礎作業を継続し、①写真資料に関しては、デジタル画像の処理・蓄積に高性能汎用機を導入して基礎実験を開始した。②文献資料に関しては、所蔵図書情報、定期刊行物所載文献及び展覧会情報の各データベースの作成を継続し、検索システムを試験的に運用している。

③情報資料部・美術部の各研究室を接続するローカルエリアネットワークの拡充を図り、外部とのオンラインによるデータ通信を実現した。(前項1参照)

2. 美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究(5年計画第4年次)

美術史研究においては、作品に関する視覚情報が重要であり、高度なイメージ処理を可能とするシステムが必須である。一方、デジタル画像処理技術は実用段階をむかえ、美術史研究への本格的な応用が強く期待される。本研究の目的は、①デジタル画像処理による美術作品の分析方法、②画像データの蓄積に関わるデータベースシステムを中心にすえている。本年度の研究内容は以下の通りである。

(1) デジタル画像処理による美術作品の分析方法の検討

線形濃度変換、擬似カラー、コントラスト強調の手法を使い、実作品の印章判読やX線写真のフィルム画像の鮮明化などの実験を行い、あわせて既存の基礎ソフトウェアの改良を行った。

(2) 画像の蓄積とデータベースシステム

1) 画像関係のデータベース・システムに関しては、昨年度に引続き文部省科学研究費「有形文化財映像データベース」(代表者・東京国立博物館 高見沢明雄)に参加し、所蔵ガラス乾板(約2,000枚)をアナログ画像として追加入力し、昨年度と合せて4120景をレーザーディスク化した。また、文字データを作成して画像データとの統合化をはかり、文字キーによる画像検索を可能とした。

2) 将来のデジタル画像データベース化の普及をにらんで汎用機(マッキントッシュ・クワドラ900)を導入した。画像処理専用機で作成した

デジタル画像の取込み、アナログ画像のデジタル画像への変換などの実験を行い、一般的な利用の可能性をさぐった。

3. 日本・東洋美術史文献データベースの開発（6年計画第5年次）

(1) データベースの作成

- 1) 定期刊行物所載文献データベースについては、昭和41年以降に刊行された古美術研究文献を対象としたデータベースの校正を継続した。
- 2) 「白馬会」展覧会出品目録データベースの作成を美術部第二研究室の協力を得て作成した。

(2) 文献データの共有化をめぐる諸問題の検討

パーソナル・コンピュータによる利用を前提とした定期刊行物所載文献データベースについては、校正の完了した約1万件のデータを対象にして検索プログラムの試行を継続した。あわせて、ジャンルコードと文献分類を検索キーとしたリストのデータ出力を実験的にを行い、データベースの出力による冊子体目録のモデル作成に備えた。

(3) 全文データベースに関する研究

前年度に完了した科学研究費総合研究(A)「美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用」(研究代表者 米倉迪夫)により作成した、日本東洋画史画論全文テキストデータについての訂正情報と活用方法などに関する報告が利用モニターから寄せられた。オフラインによる共同研究の方向をにらみながら、全文テキストデータの更新・改定と配布などの具体的方法について検討を行うとともに、研究協議会を開催して情報の収集に努めた。(各論第1項参照)

4. 古代仏教彫刻史研究

檀像研究から展開させた課題として木彫像における樹木の意義について察した(継続中)。本年度は造像譚にあらわれる古代の樹木観の分析を通じ、各樹種の表徴機能と仏教造像の関わりを考え、その成果の一部は美術部・情報資料部公開学術講座において発表した。また、関連する木彫像(伊豆、佐賀、和歌山地方所在像、在米宋代彫刻)の調査を行った。〈長岡〉

5. 鎌倉時代絵画史の研究

鎌倉時代絵画史における重要作品の調査を継続するとともに、北野天神

調査研究

縁起絵等について鎌倉時代におけるパトロンの歴史意識の産物としての性格に焦点をあて、それを「奉納」と「家」の問題から解き明かす方向を模索した。

肖像画研究の一端として藤原鎌足像や天神像など特殊な儀礼用画像の調査を開始した。神像を含めたこれらの画像と俗人画像との検討は日本の古代中世肖像画研究には不可欠な課題である。また当研究の一環として彫刻史研究者の助力を得て源頼朝彫像（甲府市善光寺）の調査をし得たが、胎内銘の判読から当像は頼朝像として非常に可能性の高い作品であり、画像を含めた頼朝像の名付けと人のイメージの問題に重要な話題を提供しうる可能性がある。〈米倉〉

6. 近世絵画史研究

平成4年度文部省科学研究費一般研究(B)「画像と言語—東洋美術史における比較研究—」により、名古屋市個人蔵「源氏物語図」、狩野探幽筆「鶴飼図屏風」(大倉文化財団)をはじめとする作品の調査・撮影を行った。〈鈴木〉

7. 請来絵画および中国絵画史研究

国内に伝存する大陸の仏教絵画について、1992年5月（山梨・東京・埼玉・新潟・富山地方）および同年10月（京都地方）の二度にわたる調査を行い、基本データと写真資料を収集した。また研究成果の一部を「陸信忠考—涅槃表現の変容—(上・下)」と題し、『美術研究』誌上に発表した。〈井手〉

また、10月から11月にかけて、東京大学東洋文化研究所東アジア部門の主宰する在台湾・香港の中国絵画調査に参加し、鴻禧美術館（台北）、香港美術館ほか個人コレクションの作品調査を行った。〈井手、鈴木〉

8. 中国における石窟美術の研究

中国の四川省・甘肅省ならび新疆ウイグル自治区の石窟寺院をたずね、阿弥陀図像を中心に調査を行った。その研究対象は絵画資料、なかでも壁画を主としつつ、同時に彫塑やその他の作例も比較考察の範疇とした。〈勝木〉

6. アジア文化財保存研究室

(1) 概 要

文化財の保護について国際的に交流や協力をはかることは、先進国である我が国の重要な責務である。特にアジアにおいて我が国は大きな役割を果たさなければならない。国際協力を行うためには、まず各国の実状についての理解が必要で、そのための情報の収集が重要である。また、貴重な文化財を保存し修復するためには、人材を養成するための研修事業が極めて重要である。さらに、文化財保存修復技術の向上のための研究を推進していくことも技術先進国である我が国の重要な責務である。以上のことから、文化財保護を目的とした情報、研修、研究の国際センターを我が国に設立すべきとの声が高まっている。

アジア文化財保存研究室は、センター設立に向けての第一歩として、平成2年10月に発足した。研究室ではアジアを中心に世界の文化財およびその保存に関する資料の収集、整理、データベースの作成を行っている。また、基礎的研究として、屋外石造文化財の劣化の地質学的研究、および石材の強化保存処置に関する材料、処置方法の研究等を行っている。さらに、アジア文化財保存セミナーの企画、実行やアジアならびに諸外国の専門家の研修などに関わる仕事も積極的に進めている。

(2) 各 論

1. アジア諸国における文化財保存に関する情報の収集

(5年計画第2年次)

(1) 文化財の劣化状態および保存対策についての調査

- 1) アジア文化財保存セミナーのアジア代表に、各国の最も代表的な文化財について、その保存状況と保存対策についてのアンケートを出し、多くの情報を得た。昨年度までに得られた情報について整理し、レポートにまとめた。＜西浦＞

- 2) タイ国の文化財について特に詳細に調査しており、またバンコクに

調査研究

ある SPAFA（東南アジア文部大臣機構・考古美術地域センター）との情報交換を開始した。＜西浦＞

- 3) 国内で開かれたアジアの文化財の保存に関わる講演会，研究会に参加し，多くの情報を得た。＜西浦，朽津＞

(2) 組織，機構，プロジェクト等についての調査

- 1) アジア文化財保存セミナーのアジア代表に，各国における文化財保存に関わる組織，機構，プロジェクト等についてその現状と問題点についてのアンケートを出し，多くの情報を得た。昨年度までに得られた情報について整理し，レポートにまとめた。＜西浦＞
- 2) 東京国立文化財研究所を訪れたアジア諸国の文化財保存関係者から個別に各国の状況を聞き取り，資料とした。＜西浦＞
- 3) 文化財の保存，修復に関わる人材について情報を収集し，データベースを作成中である。＜西浦＞

2. 屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究（5年計画第2次）

(1) 石材の劣化現象についての岩石学，鉱物学的調査研究

- 1) 新潟県立美術博物館蔵のロダン作石像の石材を岩石学的に分析し，同像が石灰の粉を用いた擬岩で作られていること，そして内部に強度の強いものを，表面に純白の材料を用いた累帯構造になっていることを明らかにした。＜朽津＞
- 2) 風化した石器を岩石学的に分析することによって，岩質による石器の劣化速度，劣化形態の違いを観察した。＜朽津＞
- 3) 博物館明治村にある重文・聖ヨハネ教会堂の煉瓦表面に析出している白華物を鉱物学的に観察した結果，酸性雨の影響が考察された。＜朽津＞
- 4) 文京区にある重文・旧岩崎邸に使われている基壇の石材を調査し，その劣化状態を観察した結果，凝灰岩中のガラスの部分が粘土鉱物に変質することによって岩石が脆弱化し，剥落が起きていることが判明した。＜朽津＞
- 5) タイ国石造遺跡の石材を調査した結果，用途によっての石材の使い分けが存在しており，特に砂岩が使われている部分で著しい劣化が観

察された。＜朽津＞

(2) 石材の保存材料に関する調査研究

- 1) 石材の強化および撥水处理に用いられる代表的なシリコン樹脂について、その物性を比較検討するための実験を行っている。凝灰岩、砂岩、安山岩試験片を用いた浸透性測定、石粒を用いた強化力評価実験が進行中であり、特に、ヨーロッパで広く用いられている変性エチルシリケート系強化剤である Wacker OH と日本で多く用いられている SS-101 との比較を行っている。＜西浦＞

- 2) 鎌倉市、史跡・永福寺跡の発掘された庭園石の露出保存方法について調査、検討した結果、撥水性シランの繰返し浸漬含浸法により保存が可能と判断し、一部実験施工を行った。＜西浦＞

- 3) イタリアで開かれた円卓会議「石造文化財保存のための材料」に参加し、わが国における現状を報告すると同時に、種々の問題点について討議した。＜西浦＞

(3) 洞窟、磨崖仏などの劣化現象と保存対策に関する調査研究

- 1) 磨崖仏など石質遺跡の新しい保存方法として、岩体中に撥水性シリコン樹脂を注入含浸し、内部（背部）に撥水層を形成して、地中水の浸入を防止する方法についての現場実験を福島県小高町の岩崖その他で行っており、施工上の問題点の検討および施工後の状態観察を行っている。本研究は科研一般（B）で行ったものであり、報告書「石質遺跡の新しい保存技術の開発に関する研究」を作成した。＜西浦、朽津＞

- 2) 福島県小高町、史跡・薬師堂石仏の劣化状態の定期的な調査を行っている。劣化原因となっている塩類には、可溶性の塩類と難溶性の塩類との2種類があり、それぞれが異なる劣化を引き起こしていることが判明した。また大屋根架設後の岩体の乾燥に伴う状態変化について、保存処置法を踏まえつつ、調査を行った。＜西浦、朽津＞

- 3) 神奈川県、重文・元箱根石仏群の保存修復に関して、岩石の樹脂含浸強化処置、撥水処置についての現地調査を行い、また、樹脂の浸透性、撥水効果（地衣類防除効果）についての現地実験を行っている。＜

調査研究

西浦>

- 4) 敦煌莫高窟洞内で、壁画顔料剥落の大きな要因の一つとして観察される塩類晶出の原因について実験的考察を行った。その結果、194窟では雨水の影響が、53窟では洪水時の浸水の影響が主たる要因として想定された。<朽津>
- 5) 敦煌莫高窟にて壁画顔料を採取し、X線回折、EPMA等による分析調査を行って、顔料の変色および剥落原因を調査した。その結果、酸化鉄が硫化鉄に変化することによる赤色顔料の黒色化、鉛丹が二酸化鉛に変化することによるオレンジ色の黒色化、そして塩基性炭酸銅の硫酸塩化による剥落、の3つの事例が観察された。<朽津>
- 6) メキシコ・テオティワカン石造遺跡の保存についての調査を行い、基本的な保存方針・対策案を提案した。<西浦、新井>

3. その他

- (1) 金属文化財の錆に関する鉱物学的研究

微小部X線回折装置を用いたマッピング分析法を開発し、金属文化財表面の錆の累帯構造を地図の形で表した。<朽津>

- (2) 木造文化財の輸送中の寸法変化に関する実験的研究

木造文化財を航空機等で輸送中の温度、湿度変化に伴う寸法変化について、恒温恒湿槽、電子天秤、歪みゲージを用いたコンピュータ計測システムによるシミュレーション実験を行った結果、内部空間の小さい状態でパッキングした場合は、湿度調節材で内部空間の相対湿度を調整することは意味がないということが明らかとなった。尚、本研究は国立歴史民俗博物館との共同研究である。<西浦>

- (3) 出土水浸木材の保存処理後の安定性に関する実験的研究

各種の保存処理を施した水浸木材試験片について、環境湿度変化に伴う重量、寸法の変化を、電子天秤、歪みゲージを用いたコンピュータ計測システムにより測定する実験を継続して行っている。今年度は特にPEG処理したものの挙動を中心に測定を行っている。尚、本研究は奈良県立橿原考古学研究所との共同研究である。<西浦>

- (4) 石材の産地推定など

- 1) 日本各地から出土した石器石材のうち、従来岩石名が不明とされていたものについて、その岩石組織を観察することによって、正確な岩石名を与えて分類を行った。また、岩石名を正確に命名するための基準を作成した。〈朽津〉
- 2) 香川県下の古墳の竪穴式石室に用いられている石材について、岩石組織に基づいて原産地推定を行い、石材の流通について議論した。〈朽津〉

4. 受託研究

(1) 入水三十三観音石仏の保存修復研究

- 1) 福島県田村郡滝根町の大理石磨崖仏である入水三十三観音石仏のクリーニングと強化、保存処置についての調査研究を行っている。第一番観音のみ独立丸彫りであるので、これを東文研に持ち込み、磨崖仏に対する現地処理を想定した種々の方法により、クリーニング、保存・修復処置の検討を行った結果、モーラ法（ゼリーパック）により、効果的にクリーニングが行えることが判った。〈西浦〉
- 2) 福島県田村郡滝根町の入水三十三観音石仏の現地調査を行い、同石仏の劣化原因について考察した。〈朽津〉

7. 国際調査研究

(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究

1. 中国における研究

(1) 第1次訪中

平成4年6月10日～24日に下記の訪中団が敦煌およびその周辺地域を訪れ、日中共同で下記の調査、研究、協議を行った。

三輪嘉六（修復技術部長）

三浦定俊（保存科学部物理研究室長）

西浦忠輝（アジア文化財保存研究室長）

岡田 健（美術部第一研究室研究員）

朽津信明（アジア文化財保存研究室研究員）

調査研究

- 1) 194(195)窟と53(469)窟に設置した温度、湿度、日照、外部風速、内部微風速計測、積算日照計システムからのデータの読み出しと初期解析。
 - 2) 上記データを常時読みとり可能にするための無線システムの構築。
 - 3) 両窟の壁画劣化状態の調査および写真撮影。
 - 4) 両窟の壁画の変色部からの顔料の採取。
 - 5) 洞窟内外での大気汚染の状況の測定。
 - 6) 当面の研究の進め方および人物交流についての協議。
 - 7) 交河故城、高昌故城等、周辺遺跡の調査。
- (2) 第2次訪中

平成4年10月9日～19日に下記の訪中団が敦煌を訪れ、日中共同で下記の調査、研究、協議を行った。

三輪 嘉六（修復技術部長）

三浦 定俊（保存科学部物理研究室長）

中野 照男（美術部第一研究室長）

勝木言一郎（情報資料部文献資料研究室研究員）

朽津 信明（アジア文化財保存研究室研究員）

富澤 邦明（庶務課長）

瀧川 孝（文化庁伝統文化課課長補佐）

- 1) 194(195)窟と53(469)窟に設置した温度、湿度、日照、外部風速、内部微風速計測、積算日照計システムからのデータの読み出しと初期解析。
- 2) 無線システムの点検と改善。
- 3) 壁画劣化状態の調査と写真撮影。
- 4) 莫高窟における壁画の保存状況と周辺微地形との関係の観察。
- 5) 大気汚染状況の計測。
- 6) 変色および剥落に関係した顔料試料の採取。
- 7) 榆林窟の劣化状態調査。
- 8) 当面の研究の進め方および人物交流についての協議。

2. 日本における研究協議または研修

- (1) 平成4年11月18日～平成4年2月14日

張擁軍（敦煌研究院保護研究所助理研究員）

目的：コンピュータによる環境機器計測に関する研修。

- (2) 平成4年12月17日～平成4年2月14日

孫儒側（敦煌研究院保護研究所嘱託〔前所長〕）

目的：木造古建築の保存、修復に関する調査研究

3. 第8回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議

平成5年3月2日、協力会議委員、文化庁関係者、東文研関係者が出席して東文研において開催され、下記の議題について討議した。

- 1) 第7回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議議事録（案）について。
- 2) 平成4年度研究結果および今後の方向について。
- 3) 平成5年度研究計画（案）について。

(2) スミソニアン研究機構との国際研究交流

今年度から「科学技術を利用した文化財研究法の開発」という新たなテーマを設けて、青銅器、陶磁器、遺跡調査法の3つの研究課題の下に共同研究を進めている。4年度は日本側から、斎藤孝正（文化庁）、青柳洋治（上智大学）が訪米し、青磁・緑釉についての共同研究をアメリカ側研究者と行ない、遺跡調査法については、西村康（奈良国立文化財研究所）、亀井宏行（千葉大学）、ディーン・グッドマン（マイアミ大学中島分室）が渡米し共同研究を行った。また昨年に引き続き、中国社会科学院世界宗教研究所の金正耀氏がスミソニアンと東京国立文化財研究所で中国の青銅器の鉛同位体分析を行った。

(3) 海外所在日本美術品調査

当研究所では、昭和63年以来、欧米所在の明治時代以前の日本美術作品に関する基礎データの収集に努めてきた。平成2年度より、古文化財科学研究会が日本芸術文化振興会から助成金を得て「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」を行うこととなり、当研究所がその委嘱を受けて調査研究を担当した。平成2年度のメトロポリタン美術館、3年度のパーク・コレクション

調査研究

ン、パーク・ファウンデーションの調査に引き続き、平成4年度はフィラデルフィア美術館が所有する作品の調査を行い、その成果として、「海外所在日本美術調査報告3」を刊行した。

(4) タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査研究

科学研究費国際学術研究海外学術調査により、本年度から3ヶ年計画で調査研究を開始した。本年度は、9月にタイ側研究者2名を招聘し、日本の保存研究状況を理解してもらうと同時に、具体的な研究の進め方について協議を行った。12月に西浦忠輝、三浦定俊、朽津信明の3人がタイ国を訪れ、東北部のクメール石造遺跡と調査し、あわせてアユタヤ遺跡、スコートタイ遺跡の調査を行った。タイ国においては遺跡の整備はよく行われているが、石材の劣化は依然として進行しており、保存対策が必要であることが再認識された。

(5) 文化財保護に関する日独学術交流

昭和59年10月8日に調印された日独科学技術協力協定に基づき、平成2年に開催された第13回日独科学技術合同交流委員会に於いて、ドイツ側より文化財保護に関する学術交流が提案された。このための最初の打合せに、平成4年5月8日～17日の間、三浦定俊（東京国立文化財研究所）、牛川喜幸（奈良国立文化財研究所）が訪独し、ドイツ側関係者と打合せを行った。平成5年3月22日から31日まで、ドイツ側関係者が来日した。また平成5年度からは文部省科学研究費を受けて、漆・ニスなど伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究が開始される。

(6) 国際会議

我が国で、初めて開催された第2回国際文化財生物劣化会議（ICBCP-2）は、同組織委員会が、これを企画・運営にあたった。保存科学部生物研究室は当初からこれに参加して、23か国から176名の参加者を迎えた会議の推進にあたった。当研究所からの研究発表は下記のとおりである。

国際調査研究

題目	発表者
各種材質に発生する褐色斑点とカビの関連性	新井英夫
フォクシング分解菌の検索と分解酵素について	新井英夫 他4名
燻蒸剤、酸化プロピレンについて	新井英夫 他4名
酸化プロピレンと臭化メチルの混合燻蒸剤について	新井英夫 他5名
山頂の厳しい環境下にある陰刻自然石の保存 —— 特に地衣類の除去と防護について ——	西浦忠輝 他1名

調査研究

8. 主要研究業績

- ①：著書・編書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表
⑤：講演・放送 ⑥：その他 平成4.4～平成5.3

所 長

西川杏太郎

- | | | | |
|-----------------------|------------------------|-------|------|
| ③ 東寺の八幡三神像 | 「光の日々」22 | 東寺 | 4.12 |
| ③ 優艶な十一面観音（室生寺） | 『魅惑の仏像』21 | 毎日新聞社 | 4.10 |
| ③ 燈籠を捧げる小鬼たち（興福寺） | 『魅惑の仏像』22 | 毎日新聞社 | 4.11 |
| ③ 一木彫の名作，如意輪観音（宝菩提院） | 『魅惑の仏像』23 | 毎日新聞社 | 4.12 |
| ③ たくましい木の造型（薬師如来，神護寺） | 『魅惑の仏像』24 | 毎日新聞社 | 5. 1 |
| ③ 群像の名作，廿八部衆（妙法院） | 『魅惑の仏像』25 | 毎日新聞社 | 5. 2 |
| ③ 一木彫，迫力の造型（釈迦如来，室生寺） | 『魅惑の仏像』26 | 毎日新聞社 | 5. 3 |
| ⑤ 学芸員のための美術史研究 | 博物館職員講習（国立教育会館社会教育研修所） | | 4. 6 |
| ⑤ 伝統文化と文化財 | 会計検査院特別研修 | | 4.12 |

美 術 部

鶴田 武良（美術部長）

- | | | |
|---------------------------------|-------------------------------|------|
| ② 日本における中国絵画の受容 「中国明清時代絵画名作展」図録 | 宮城県美術館 | 4. 8 |
| ② 現代中国画壇の動向——文革後の15年—— | 「現代中国書画名作展」図録 同展実行委員会 | 4.10 |
| ③ 「中国年鑑1992年版」美術の項 | 中国研究所 | 4. 6 |
| ④ 民国期における裸体画論争 | 第16回国際研究集会「東アジア美術における〈人のかたち〉」 | |

主要研究業績

- ④ 近代中国における西洋美術の受容 「'93日中美術シンポジウム」
国立西洋美術館 4.10. 1
日経ホール 5. 3.26
- ⑤ 乾隆時代揚州の画家 神戸市立博物館 4. 4.25
- ⑤ 清朝絵画と来舶画人 泉屋博古館 4.11. 7
- ⑥ 作家略歴40名 (翻訳) 「中国明清時代絵画名作展」図録
宮城県美術館 4. 8
- ⑥ 劉徳潤・李燕「黄河のほとりで」(翻訳)
「現代中国の絵画三人展」図録 日中友好会館美術館 5. 3
- ⑥ 孫本長「中国の大地に立って自ら風格をつくる」(翻訳)
「現代中国の絵画三人展」図録 日中友好会館美術館 5. 3

佐藤 道信 (主任研究官)

- ① 『菱田春草』(編共著, アーティスト・ジャパン32) 同朋社出版 4. 9
- ① 『幕末・明治の画家たち』(共著, 狩野芳崖) べりかん社 4.12
- ① 『竹内栖鳳』(編共著, アーティスト・ジャパン57) 同朋社出版 5. 3
- ② 鑑画会とフェノロサ
『日本近代美術と西洋』(明治美術学会) 中央公論美術出版 4. 4
- ② 大観・春草の欧米遊学と朦朧体 『日本美術院百年史』第3巻 4. 9
- ③ 作品解説 『日本美術全集』22 洋画と日本画 講談社 4. 4
- ③ 作品解説 『皇室の至宝』8 御物 障屏・調度Ⅲ 毎日新聞社 4. 5
- ③ 名画の背景 (アーティスト・ジャパン18 『橋本雅邦』) 同朋社出版 4. 8
- ③ 河鍋晩斎筆閻魔大王浄玻璃鏡図 「青淵」521 竜門社 4. 8
- ③ 作品解説 『秘蔵日本美術大観』3 大英博物館 Ⅲ 講談社 5. 2
- ④ 人から人“間”へ——個としての人体
第16回国際研究集会「東アジア美術における〈人のかたち〉」
国立西洋美術館 4.10. 1
- ④ 日本美術観の形成
美術部・情報資料部公開学術講座 国立西洋美術館 4.11.28
- ④ 晩斎芸術の二重構造

調査研究

河鍋晩斎記念美術館開館15周年記念講演会及び研究会 4.11.

- ⑤ 黒田清輝と近代日本美術 北海道立旭川美術館 4. 5.

島尾 新（主任研究官）

- ② 雪舟等楊の研究（二）－「五山文学」のなかの画家たち－
「美術研究」356 4. 3
- ③ 湖山小景図等解説 『日本水墨名品図譜』2 毎日新聞社 4. 9
- ③ 四季山水図等解説 『日本水墨名品図譜』3 毎日新聞社 4.12
- ④ 会所の美術 歴史民俗博物館共同研究「都市における交流空間の研究・
権力表象と儀礼」研究会 4. 6.12
- ④ 柿本人麿像における“かたち”と“意味”
第16回国際研究集会「東アジア美術における〈人のかたち〉」
国立西洋美術館 4. 9.30

中野 照男（第一研究室長）

- ① 閻魔・十王像 『日本の美術』313 4. 6
- ③ 国宝普賢菩薩像 「ムディター」夏 4. 7
- ③ 文殊菩薩及び眷属像 「文部時報」1387 4. 7
- ③ 法隆寺金堂外陣旧壁画・法隆寺金堂内陣旧壁画
『日本美術全集』3 正倉院と上代絵画 講談社 4.10
- ③ 春日本地仏曼荼羅図 「文部時報」1391 4.11
- ③ 兜率天曼荼羅図 「文部時報」1395 5. 3
- ③ 高麗時代の地蔵十王図 「美術研究」356 5. 3
- ③ 柿本人麿像ほか 『特別展図録 詩歌と書』 東京国立博物館 5. 3
- ④ クムトラ石窟の中国様式絵画 美術部・情報資料部研究会 4. 7.15
- ⑤ 中国敦煌出土の十王経図巻 四街道市消費者講座 5. 2.16

岡田 健（第一研究室）

- ② 中国南北朝時代の如来像着衣の研究（上）
（石松日奈子と共著） 「美術研究」356 5. 3

- ② 仏教彫刻における朝鮮半島と中国・山東半島の関係
科学研究費（国際学術研究）「日韓両国に所在する韓国仏教美術の
共同調査研究」研究成果報告書 奈良国立博物館 5. 3
- ④ 河南省・鞏県石窟の初唐造像 美術部・情報資料部研究会 4. 6. 3

三輪 英夫（第二研究室長）

- ② 『小宴紀念』画帖について 『近代画説』 1 4.11
- ③ 洋画家・久米桂一郎のこと
「久米邦武と久米桂一郎」展図録 博物館明治村 4. 4
- ③ 井手誠一の画業 「井手誠一展」図録 佐賀県立美術館 5. 1
- ⑤ 黒田清輝一人と作品一 北海道立帯広美術館 4. 7. 4
- ⑤ 満谷国四郎と日本近代洋画 岡山県立美術館 5. 1.24

山梨絵美子（第二研究室）

- ① 『黒田清輝』（アーティスト・ジャパン22） 同朋社出版 4. 7
- ① 『幕末・明治の画家たち』（共著 油絵を描く将軍） ぺりかん社 4.12
- ② 黒田清輝の風景表現とその影響
『日本近代美術と西洋』（明治美術学会） 中央公論美術出版 4. 4
- ② 黒田清輝と公的な場の絵画 『美術史の六つの断面』 美術出版社 4.11
- ③ 『日本美術全集』22洋画と日本画 黒田清輝「読書」他10点 講談社 4. 4
- ⑥ 翻訳「アメリカ美術の150年展」図録掲載論文
「アメリカ美術の150年展」図録 朝日新聞社 4. 4
- ⑥ 翻訳 トーマス・ライマー著「西洋人の眼が見た洋画と日本画」
『日本美術全集』22洋画と日本画 講談社 4. 4

芸能部

蒲生 郷昭（芸能部長）

- ① 音と映像による日本古典芸能大系 総論編（岸辺成雄ほか4名との共同監修）
日本ビクター 4.10
- ② 平曲の曲節名をめぐる

調査研究

- 上参郷祐康編『平家琵琶——語りと音楽——』 ひつじ書房 5. 2
- ② 延年の音楽——小迫の場合—— 「芸能の科学」 21 5. 3
- ② 長唄正本研究116~127 (共同研究) 「邦楽と舞踊」 512~523 4.4~5.3
- ③ 「舞楽の構造」「音楽としての声明」「歌舞伎音楽の種々相」
「義太夫節の音楽的特質」「語り物の楽器」「江戸長唄の音楽的特質」
「三曲の楽器」 「別巻1, 2 補説 (一部)」
- 音と映像による日本古典芸能大系 総論編 日本ビクター 4.10
- ④ 日本の音楽理論用語 芸能部夏期学術講座 4.7.13~16

鎌倉 恵子 (主任研究官)

- ② 近松の表現——音曲として——
『元禄文学の開花』Ⅲ (『講座元禄の文学』4) 勉誠社 5. 3
- ② 毛越寺の祝詞 「芸能の科学」 21 5. 3
- ③ 津国女夫池 『元禄文学の開花』Ⅲ (『講座元禄の文学』4) 勉誠社 5. 3

羽田 昶 (演劇研究室長)

- ② 「延年」の定義と概念について 「芸能の科学」 21 5. 3
- ③ 花子, 身替座禪, 小歌 野村耕介狂言の会パンフレット 4. 6
- ③ 乱拍子, そして急ノ舞 『別冊太陽79 道成寺』 平凡社 4.10
- ③ 狂言「素袍落」 NHK 古典芸能鑑賞会パンフレット 5. 2
- ③ 謡の魅力 国立能楽堂企画展「能の謡」パンフレット 5. 3
- ④ 能・狂言の演技と扇 芸能部公開学術講座 4.12.10
- ⑤ 能・狂言鑑賞入門 Ⅲ NHK 教育テレビ 4. 4~5
- ⑥ 復曲「鐘巻」を見て 「月刊みんおん」 9月号 4. 9
- ⑥ アンドリユー・椿演出の狂言を見て 能楽タイムズ10月号 4.10
- ⑥ 狂言「眉目吉」台本校訂 国立能楽堂狂言公演 4. 9.18
- ⑥ 狂言「唐人相撲」監修 蝸牛の会10周年記念公演 4.12.3~5

高橋 美都 (演劇研究室)

- ② 寺社行事に伴う「舞楽」の受容と変容について 「芸能の科学」 21 5. 3

主要研究業績

- ③ 雅楽寮から明治撰定譜まで 宮内庁楽部特別鑑賞会プログラム 5. 1
 ④ 漢字文化の意義——唐代音楽理論の日本式受容と展開——
 東亜符号学研討会 (East Asia Semiotic Seminar) 於 武漢大学 4. 10
 ④ 下村・加茂神社の稚児舞をめぐる 民俗芸能学会第41回研究例会 5. 1

高桑いづみ (音楽舞踊研究室)

- ① 講座 能・狂言別巻『能楽図説』(横道萬里雄 他と共著) 岩波書店 4. 5
 ② 中世芸能と能の囃子 「国文学」12月号 学燈社 4. 12
 ② 鬼の囃子の古態——〈早笛〉でハタライた可能性——
 「芸能の科学」21 5. 3
 ③ 「翁」の構成と音楽 国立劇場特別企画公演〈乱声〉パンフレット 5. 3
 ④ 絵画資料に見る鼓の変遷 所内総合研究会 4. 12. 8
 ⑤ 上演曲目解説 国立能楽堂公開講座 5. 1~2

丸茂美恵子 (音楽舞踊研究室)

- ② 日本舞踊における娘形作品の技法研究 (27~30)
 「季刊 舞踊研究」61~64 4. 6~5. 3
 ② 日本舞踊の計量的研究の試み (連載「舞踊の科学」4)
 「体育の科学」42-7 4. 7
 ② 六代目尾上菊五郎の「うかれ坊主」について 「舞踊学」15 5. 2
 ③ 舞踊の小道具 「日本舞踊鑑賞入門」III 4. 4
 ③ 「島の千歳」ほか71曲 舞踊華扇会・春の会プログラム 4. 5
 ③ 「廓八景」ほか19曲 関西舞踊華扇会プログラム 4. 5
 ③ 「北州」ほか70曲 舞踊華扇会プログラム 4. 8
 ③ (舞踊) 昔話の特集 花柳寿魁の会 4. 10
 ③ 能狂言物の素踊形式 若柳寿延リサイタルプログラム 4. 10
 ③ 「尾上の雲賤機帯」 岩井紫若舞踊集成〈その六〉プログラム 4. 10
 ③ 「傀儡師」ほか9曲 「至芸 伝統のきわみ」プログラム 4. 9
 ⑥ 国史大辞典 第14巻 (流派・人名項目) 吉川弘文館 5. 3
 ⑥ 舞踊美を織る (72~83) 「邦楽と舞踊」502~513 4. 4~5. 3

調査研究

- ⑥ 至芸 伝統のきわみ (共同構成) テレビ東京 4.11

中村 茂子 (民俗芸能研究室長)

- ② 民俗芸能に見る延年の諸相 その2 「芸能の科学」21 5. 3
④ 扇の芸能史的展開 芸能部公開学術講座 4.12.10

山本 宏子 (民俗芸能研究室)

- ① 『伝統民俗文化の継承と支援——日本文化の創造と地域の創造』(共著)
びあ総合研究所 5. 3
② 沖縄音階の歴史と構造 「ウチナー・ポップ」東京書籍 4.10
② 沖縄読谷村のエイサーの伝承組織 「芸能の科学」21 5. 3
—— 民俗芸能の伝承組織と社会・経済構造との相互規定関係 ——
③ 沖縄の人々と笛 「笛に生きる」プログラム 5. 3
④ 民俗芸能の経済学——伝承組織はどう変わりつつあるか
民俗芸能学会 4. 5
④ バリ島テンガナン村の祭りと音楽 日本民族学会 4. 5
④ 沖縄のエイサーと社会・経済構造との相互規定関係 東洋音楽学会 4. 6
⑤ バリ・アガの村テンガナンへのヒンドゥーの波 バリ芸能研究会 4. 9
⑤ バリ・アガの村テンガナンの祭りと芸能を支える村組織
朝日カルチャーセンター 5. 2
⑥ バリ島テンガナン村の口琴 「琴ジャーナル」4 4. 6
⑥ バリ島のわらべうたを追いかけて・その1 「スラット・バリ」13 5. 3

保存科学部

新井 英夫 (保存科学部長)

- ① 第2回国際文化財生物劣化会議 (ICBCP-2) プレプリント
(2nd International Conference on Biodeterioration of
Cultural Property, Yokohama-92, Preprint)
ICBCP-2 組織委員会 4.10
② 黴 (カビ) と光学機器 (金子と共著) 「光技術コンタクト」30 4. 5

主要研究業績

- ③ 文化財にみる生物被害 「マテリアルライフ」 4 4. 4
- ③ 第2回国際文化財生物劣化会議の開催について
「文化財の虫菌害」 23 4. 7
- ③ 第2回国際文化財生物劣化会議の概要(1)
「文化財の虫菌害」 24 4.12
- ④ 各種材質に発生する褐色斑点とカビの関連性
(Relationship Between Fungi and Brown Spots Found in Various Materials) IBCBP-2 Preprint 4.10.6
- ④ フォクシング分解菌とその酵素の検索(松尾, 井上, 中村, 阿部と共同)
(Screening of Defoxing Microorganisms and Their Enzyme) IBCBP-2 Preprint 4.10.6
- ④ 燻蒸剤, 酸化プロピレンについて(山崎, 山野, 見城と共同)
(On Propylene Oxide as a Fumigant) IBCBP-2 Preprint 4.10.7
- ④ 酸化プロピレンと臭化メチルの混合燻蒸剤について
(木村, 宮地, 井上, 山崎, 山野と共同)
(On the Mixed Fumigants Comprising of Propylene Oxide and Methyl Bromide) IBCBP-2 Preprint 4.10.7
- ⑤ 図書館資料の生物被害と保存対策 (第12回西洋社会科学古典資料講習会)
一橋大学社会科学古典資料センター 4.10
- ⑤ 各種材料の褐色斑点について (第14回文化財の虫菌害保存対策研修会)
(財)文化財虫害研究所 4. 6
- ⑥ 文化財の天敵こうして退治 日本経済新聞 朝刊文化欄 4. 8.27
- ⑥ 褐色斑点の防除を討論 読売新聞 夕刊文化欄 4.11. 9

門倉 武夫 (主任研究官)

- ② 文化財の保存環境と汚染因子
「環境と測定技術」 19(10) pp.34-46 4.10
- ② 蛍光X線分析法・X線回折法による調査
東京国立博物館 「江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀保存修理報告書」
pp.76-78 5. 3

調査研究

- ④ 文化財に及ぼす酸性雨の影響評価法の検討[I]
第14回古文化財科学研究会大会要旨集 4. 5.24
- ⑤ 文化財に及ぼす環境汚染の影響 大気汚染学会関東支部講演会 4. 9.30
- ⑤ 文化財の保存科学と環境科学 工学院大学公開講座 4.10.17
- ⑤ 文化財をとりまく大気汚染の問題点
第33回大気汚染学会文化財影響評価分科会 4.12. 1
- ⑤ 大気汚染と文化財保存の歩み
平成4年度文化財保存修復研究協議会 4. 2.26
- ⑥ 文化財に及ぼす酸性雨の影響についての研究 NHK テレビ 4. 4. 8
- ⑥ 考える人の涙とまらず 朝日新聞 朝刊社会面 4.10. 5
- ⑥ 屋外彫刻の被害が深刻「ブロンズ像健康診断へ」
産経新聞 夕刊科学欄 4. 2.17

石川 陸郎（主任研究官）

- ⑤ 博物館・美術館館内の環境制御
三重県教育委員会講演会 4.10

平尾 良光（化学研究室長）

- ① 『分析化学ハンドブック（基礎編）』 分担執筆
黒田六郎編，朝倉書店 4.11
- ② 北魏仏の科学的調査 「考古学と自然科学」26 pp.15-28 4.12
- ② ベルー共和国，クントゥル・ワシ遺跡から出土した遺物の科学的調査
（大西，大貫，加藤と共著） 「考古学と自然科学」25 pp.13-30 4. 6
- ② カマンーカレホユック遺跡から出土した銅製品の鉛同位体比
（佐々木，竹中，内田と共著）
中近東文化センター編 「アナトリア考古学研究」1 pp.165-186 4. 5
- ② カマンーカレホユック遺跡第5次調査（1990年）で出土した銅製品の化学的測定（榎本と共著）
中近東文化センター編 「アナトリア考古学研究」2 pp.33-50 5. 3
- ② X線回折装置によるマッピング操作の文化財への応用（朽津と共著）

- 「分析化学」41 pp.9-11 4.11
- ③ 「科学的調査」(榎本と共著)
東京国立博物館 「有銘環頭大刀 修理報告」 pp.27-40 4. 3
- ③ 法隆寺献納宝物 水瓶の蛍光X線法による材質の調査
東京国立博物館 「法隆寺献納宝物特別調査 XIII」
「水瓶」 pp.26-32 4. 3
- ④ 東アジアにおける青銅の流れ
韓国, 湖巖美術館10周年記念講演会講演集 pp.2-15 4.10
- ④ ヒットタイト金属鉄の自然科学的研究
(田口, 斎藤, 平井, 中井, 大村と共同)
日本文化財科学会第9回大会 pp.28-29 4. 5.30

三浦 定俊 (物理研究室長)

- ② ロダン作石像「カリアティードとアトランド」の調査 (朽津, 桐原と共著)
「古文化財の科学」37 pp.21-28 4.12
- ② 化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究
科学研究費重点領域研究「遺跡探査」
「第1回研究成果検討会議論文集」 pp.78-81 5. 2
- ② エミシオグラフィによる調査
「江田船山古墳出土国宝銀象眼銘大刀保存修理報告書」 pp.70-75 5. 3
- ③ 科学的・光学的情報を用いた遺跡探査
「遺跡探査ニュースレター」1 pp.14-15 4. 4
- ④ 絵絹の劣化の定量的評価 (II)ー経年劣化資料への応用ー
(佐野・馬淵・川野邊と共同) 日本文化財科学会第9回大会 4. 5.31
- ④ ボケのあるX線画像の修復と合成 (大橋と共同)
第14回古文化財科学研究会講演会大会 4. 5.24
- ⑤ 梱包概論 (梱包の科学)
平成4年度指定文化財 (美術工芸品) 展示取扱講習会 (東京) 4. 7.23
同上 (京都) 4.12. 3
- ⑤ 石窟・壁画と保存科学

調査研究

平成4年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「保存科学基礎課程」 5. 1.25

佐野 千絵 (物理研究室)

- ② コンクリートから発生するアルカリ性物質について—アンモニア濃度簡易判定の試み
「古文化財の科学」37 4.12
- ④ 絵絹の劣化の定量的評価 (II)—経年劣化資料への応用—
(三浦・馬淵・川野邊と共同) 日本文化財科学会第9回大会 4. 5.31
- ④ コンクリートから発生するアルカリ性物質について
—アンモニア濃度簡易判定法の開発—
第14回古文化財科学研究会大会 4. 5.24
- ⑤ 展示照明がものに与える影響
埼玉県立博物館展示取り扱い講習会 5. 1.21

山野 勝次 (生物研究室)

- ② 増えるアメリカカンザイシロアリの被害 「家屋害虫だより」1 4.10
- ② 丹生都比売神社で発生したオオハナカミキリの被害と防除対策
「文化財の虫菌害」24, pp.11-19 4.12
- ② 金属溶射被膜による防蟻処理 (第5報)
—金属溶射被膜の防カビ性に関する現場実験—
「家屋害虫」14(2), pp.75-81 4.12
- ② 第2回国際文化財生物劣化会議に出席して
「家屋害虫」14(2) 4.12
- ② 「第2回国際文化財生物劣化会議」報告 「しろあり」91 5. 1
- ③ イエシロアリの被害と防除薬剤 (座談会の司会とまとめ)
「しろあり」89 4. 7
- ④ 燻蒸剤酸化プロピレンについて (山崎, 新井, 見城, 李と共同)
(On Propylene Oxide as a Fumigant)
2nd International Conference on Biodeterioration of
Cultural Property (ICBCP-2) Preprint 4.10. 8
- ④ 酸化プロピレンと臭化メチルの混合燻蒸剤について

- (木村, 宮地, 井上, 山崎, 新井と共同)
- (On the Mixed Fumigants Comprising of Propylene Oxide and methyl Bromide) IBCBP-2 Preprint 4.10. 8
- ④ 崇福寺のイエシロアリによる被害とその防除 (ポスター)
- (On the Damage caused by the Formosan Subterranean Termite and Its Control at Sōfukuji Temple (Poster))
- IBCBP-2 Preprint 4.10. 6~8
- ⑤ 文化財の害虫と防除対策 第14回文化財の虫菌害保存対策研修会
- (財)文化財虫害研究所 4. 6.17
- ⑤ 生物被害<虫>-害虫の生態と被害-
- 博物館美術館等の保存担当者学芸員研修 4. 7.31
- ⑤ シロアリに関する実務的知識
- (平成4年度しろあり防除施工士資格第2次指定講習会)
- (社)日本しろあり対策協会 4. 9.11
- ⑤ 文化財虫菌害燻蒸処理仕様書ならびに危害防止措置規定について
- (第12回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会)
- (財)文化財虫害研究所 4.11.18
- ⑤ 昆虫学の基礎知識, 昆虫による文化財の被害と防除, 文化財の殺虫燻蒸
- (第14回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会)
- (財)文化財虫害研究所 5. 1.18
- ⑤ シロアリの生態と被害
- (平成5年度しろあり防除施工士資格第1次指定講習会)
- (社)日本しろあり対策協会 5. 1.28
- ⑤ シロアリと私 「文化財の虫菌害」24 4.12

修復技術部

三輪 嘉六 (修復技術部長)

- ① 『重文下野七廻り鏡塚古墳出土品の修理』(編著) 大平町教育委員会 5. 3
- ① 『やきもの辞典』(共編) 平凡社 4. 4
- ① 「窯壁の岩石学的研究——焼成回数推定への試み——」(朽津と共著)

調査研究

『セラミック九州』25 4. 4

④ 「中国石窟遺跡の保存」 仏教文化・寺と窯跡

第4回東海地区埋蔵文化財研究大会 4.10

⑤ 「考古資料の保存修理」 博物館美術館等の保存担当者学芸員研修 4. 8. 5

中里 壽克（第一修復技術研究室長）

① 中尊寺の漆芸 『日本の美術』318号 4.11.15

⑤ 公開講座 文様学II 会津若松技術支援センター 4.10.30

⑤ 劣化と保存各論VII－漆芸品－
博物館・美術館等の保存科学担当学芸員研修 4. 8. 5

増田 勝彦（第二修復技術研究室長）

② フリーア美術館所蔵絵画料紙の繊維分析 「保存科学」38 5. 3

③ 紙や布で出来た文化財の保存と修復
東京都教育委員会「文化財の保護」25 5. 3

⑤ 劣化と保存各論III－表具－ 保存担当学芸員研修 4. 8. 5

⑤ 絵画類の修復と保存について 早稲田大学図書館 4. 6.30

⑤ 企業史料協議会研修 4. 7. 2

⑤ 紙の修復 日本古文書学会「研究会」 5. 1.23

⑤ 史料の保存 埼玉県文書史料取扱講習会 5. 2. 2

⑤ 火災を受けた史料の救助法 記録史料の保存を考える会 5. 2.27

⑥ 「紙の保存」国際研修 講師 4.10.26～11.14

尾立 和則（第二修復技術研究室）

③ 日本の表具技術が世界の文化財を救う 「月刊文化財」 5. 3

⑥ 「紙の保存」国際研修 講師 4.10.26～11.14

青木 繁夫（第三修復技術研究室長）

② 出土鉄製品の安定化処理 「国立歴史民俗博物館報告」38 4. 6

② 建築金具の耐久性 「バウンダリー」8巻5号 4.10

② Stabilization of Archaeological Iron

『Curent Problemes in the Conservation of Metal Antiquities』 5. 3

- ⑤ 日本における考古試料の保存について ジンバブエ考古局 4. 5.14
 ⑤ 考古・民俗資料の修理 歴史民俗資料館等専門職員研修会 4.11.20
 ⑤ 環境汚染による文化財の劣化 文化財保存修復協議会 5. 2.26

情報資料部

米倉 迪夫 (文献資料研究室長)

- ③ 源頼朝像『見る・読む・わかる 日本の歴史』2中世 朝日新聞社 5. 2
 ④ 『うたたね草紙』—歴史民俗博物館本とボストン美術館本—
 古代中世絵画史研究会 4. 7.25

井手誠之輔 (文献資料研究室)

- ① 「井手誠一回顧展」図録 佐賀県立美術館・佐賀新聞社 5. 1
 ② 陸信忠考—涅槃表現の変容—(上) 「美術研究」354 4. 9
 ② 陸信忠考—涅槃表現の変容—(下) 「美術研究」355 5. 1
 ③ 金農筆「枇杷図」など解説5点
 「高雅な文人の世界展」図録 熊本県立美術館 4.10
 ③ 霊彩筆「三酸図」など解説5点
 『日本美術全集』12水墨画と中世絵巻 講談社 4.12
 ③ 沈南蘋筆「餐香宿艶図」など解説2点
 『皇室の至宝』13中国美術 毎日新聞社 5. 3
 ⑤ 中国の仏教絵画 神奈川県立金沢文庫夏期講座 4. 8. 9
 ⑥ 風景日本海—父の思い出— 『佐賀新聞』 5. 1. 3

勝木言一郎 (文献資料研究室)

- ② 敦煌莫高窟第二二〇窟阿弥陀浄土変相図考 「佛教藝術」202 4. 6
 ③ 埼玉県仏教絵画調査報告書 埼玉県教育委員会 5. 3
 ⑤ シルクロードと仏教美術 東久留米市市民講座 4.12.13
 ⑥ 敦煌莫高窟における大気降塵の初歩的研究 (翻訳)

調査研究

- 「古文化財の科学」 37 4.12
- ⑥ 中国古代墓室壁画の発見と研究およびその保護方法について (翻訳)
「佛教藝術」 206 5. 1
- ⑥ 禅宗六代祖師像卷 (翻訳) 同朋舎出版 5. 3

鈴木 廣之 (写真資料研究室長)

- ② 「美術」をめぐる制度と日本美術史 「月刊百科」 364 5. 2
- ③ 岩佐又兵衛筆「伊勢物語梓弓図」ほか5点
『日本美術全集』17狩野派と風俗画 講談社 4. 6
- ③ 豊国祭礼図屏風
『見る・読む・わかる 日本の歴史』3近世 朝日新聞社 4.12
- ③ 第十六回文化財の保存に関する国際研究集会—東アジア美術における
〈人のかたち〉—を終えて 「月刊文化財」 351 4.12
- ③ 異国の富への憧れ—南蛮屏風
『見る・読む・わかる 日本の歴史』2中世 朝日新聞社 5. 2
- ③ 狩野松栄筆「遊猿図襖」ほか3点
『日本水墨名品図譜』4 狩野派と琳派 毎日新聞社 5. 3
- ④ 探幽筆「鶴飼図」を読む 第54回東京読画連 5. 2.18

長岡 龍作 (写真資料研究室)

- ③ 作品解説 『日本美術全集』5 密教寺院と仏像 講談社 4. 8
- ④ 「様」と仏像表現 所内総合研究会 4. 6. 8
- ④ 古代木彫仏研究序説—型と素材をめぐる—
美術部・情報資料部公開学術講座 国立西洋美術館 4.11.28

アジア文化財保存研究室

西浦 忠輝 (アジア文化財保存研究室長)

- ③ 第2回アジア文化財保存セミナー「博物館資料の保存」
『月刊文化財』4月号 4. 4
- ④ 丹色塗装の屋外曝露試験 (川野邊, 岡部と共同)

主要研究業績

- 第15回古文化財科学研究会講演会大会 4. 6
- ④ 石材用樹脂の評価試験〔I〕—強化用樹脂の浸透(1)— (車塚と共同)
- 第15回古文化財科学研究会講演会大会 4. 6
- ④ Conservation of Carved Natural Stone Under Extremely Severe Conditions on the Top of a High Mountain - Elimination of Lichens and Protective Treatment -. (Ebisawa と共同)
- 2nd International Conference on Biodeterioration
- of Cultural Property 4.10
- ⑤ シベリア・シシュキノ岸壁画の保存調査
- 東京国立文化財研究所総合研究会 4.11
- ⑤ Conservation of Stone in Japan メキシコ文化財修復学院 5. 1
- ⑤ 劣化と保存各論—木— 博物館, 美術館等保存担当学芸員研修 4. 7
- ⑤ 劣化と保存各論—石— 博物館, 美術館等保存担当学芸員研修 4. 7
- ⑤ 石造文化財の劣化と保存対策 第37回埼玉県文化財講習会 4. 8
- ⑤ The Current Situation in Japan: The Conservation of Rock Reliefs.
- 3rd International Conference for Study and Conservation of Works of Art 4.10
- ⑥ 敦煌文化財の保存修復に関する研究論文集〔I〕
- 東京国立文化財研究所 4. 9
- ⑥ 第3回アジア文化財保存セミナー会議録
- (朽津, 佐野と共同) 東京国立文化財研究所 5. 2
- 朽津 信明 (アジア文化財保存研究室)
- ② 石器石材の名称について 「石器文化研究」 4 4. 4
- ② Sanukite and high-magnesian andesite in Northeast Shikoku.
- (Sato と共著) 「29th IGC Field trip B24」 4. 7
- ② 博物館明治村で観察された蒸発岩 「岩鉱」 87 4. 9
- ② 偏光顕微鏡観察による石材原産地推定法の有効性—ブラインドテストによる検証— (柴田と共著) 「考古学と自然科学」 31 4.10
- ② 微小部X線回折装置による劣化した文化財のマッピング分析

調査研究

- (平尾と共著) 「分析化学」 41 4.11
- ② ロゲン作石像「カリアティードとアトラント」の調査
(三浦・桐原と共著) 「古文化財の科学」 37 5. 3
- ③ 「勝利の女神」像の劣化状況 「ブリヂストン美術館美術館館報」 40 4. 4
- ④ 敦煌莫高窟の地質環境 日本地質学会第99年年会 4. 4
- ④ 微小部X線回折マッピング法の文化財への応用性
古文化財科学研究会第12回大会 4. 5
- ④ 敦煌莫高窟における壁画の塩類風化 (段と共同)
日本文化財科学会第9回大会 4. 5
- ④ 敦煌莫高窟における蒸発岩の形成 (段と共同) 日本第四紀学会大会 4. 9
- ④ 文化財の表層で観察される物質循環 表層環境物質循環セミナー 4.11
- ④ 文化財の表面でみられる変質鉱物 日本岩石鉱物鉱床学会大会 5. 1
- ⑥ 歴博フォーラムに参加して 古文化財の科学通信45 4. 6
- ⑥ アジア文化財保存セミナー邦文要旨集<翻訳> 4.11
- ⑥ アジア文化財保存セミナー会議録 (西浦, 佐野と共著) 5. 2
- ⑥ 敦煌莫高窟の自然環境と文物の保存 (孫儒憫氏の講演の要約)
古文化財の科学通信49 5. 3

IV. 事 業

1. 出 版

(1) 美術研究

平成4年度は第354号から第356号が下記の内容で刊行された。

美術研究 第354号 (平成4年9月)

初期神宮寺の成立とその本尊の意味

—神護寺薬師如来立像の造像理由をてがかりにして— 長坂 一郎

陸信忠考 —涅槃表現の変容— (上) 井手誠之輔

白馬会展覧会出品目録 (一)

第一回～第六回展 (研究資料) 美術部第二研究室

美術研究 第355号 (平成5年1月)

前島宗祐小考 —四季耕作図屏風の紹介をかねて— 相澤 正彦

陸信忠考 —涅槃表現の変容— (下) 井手誠之輔

白馬会展覧会出品目録 (二)

第七回～第十三回展 (研究資料) 美術部第二研究室

美術研究 第356号 (平成5年3月)

中国南北朝時代の如来像着衣の研究 (上) 岡田 健

石松日奈子

雪舟等楊の研究 (二)—「五山文学」のなかの画家たち— 島尾 新

高麗時代の地藏十王図 (図版解説) 中野 照男

(2) 日本美術年鑑

平成4年版 (平成5年3月発行)

平成3年の内容をもつ。B5版308頁。

平成3年の美術界年史

事業

美術展覧会（現代美術・西洋美術）

美術展覧会（東洋古美術）

美術文献目録（定期刊行物所載）（現代美術・西洋美術）

美術文献目録（定期刊行物所載）（東洋古美術）

物故者

(3) 芸能の科学

古典芸能についての研究論文，調査報告，資料翻刻等を掲載している。平成4年度は下記の論考集を刊行した。

芸能の科学21芸能論考 XIV（平成5年3月発行）

「延年」の定義と概念について	羽田 昶
民俗芸能にみる延年の諸相 その二	
——種目名としての延年試案——	中村 茂子
毛越寺の祝詞	鎌倉 恵子
延年の音楽（上）——小迫の場合——	蒲生 郷昭
寺社行事に伴う「舞楽」の受容と変容について	
——四天王寺舞楽の伝播説をめぐる——	高橋 美都
鬼の囃子の古態——〈早笛〉でハタライた可能性——	高桑いづみ
沖縄読谷村のエイサーの伝承組織	
——民俗芸能の伝承組織と社会・経済構造との相互規定関係——	
	山本 宏子
延年関係資料・文献目録	芸能部

(4) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査，受託研究報告等の論文報告および修復処置等を掲載している。平成4年度は第32号を発行した。掲載論文は下記の通りである。

保存科学 第32号

燻蒸剤，酸化プロピレンについて

事 業

山崎 真司・新井 英夫・山野 勝次・見城 敏子・李 奎 植
新設博物館・美術館等に於ける保存環境調査の実際

三浦 定俊・佐野 千絵・石川 陸郎
フリーア美術館所蔵絵画料紙の繊維分析 増田 勝彦
敦煌莫高窟における塩類の晶出と壁画の劣化 朽津 信明・段 修業

2. 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作を多く所蔵している当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、併せて地方文化の振興に資するために、昭和52年度からの事業として黒田清輝巡回展を年1回地方において開催してきた。平成4年度は次のとおり2会場において開催された。

会 場 北海道立旭川美術館
会 期 平成4年5月23日(土)～6月28日(日)
主 催 東京国立文化財研究所・北海道立旭川美術館
開催日数 32日間
入場者数 6,929人

会 場 北海道立帯広美術館
会 期 7月4日(土)～8月9日(日)
主 催 東京国立文化財研究所・北海道立帯広美術館・帯広市
開催日数 32日間
入場者数 6,853人

陳列点数 油彩・パステル59点、木炭デッサン50点、写生帖17冊、書簡
3点、日記5冊、参考資料若干

図 録 A4版変型、128頁、原色図版24頁、単色図版73頁

3. 公開学術講座

美術部・情報資料部(第26回)

日 時 平成4年11月28日(土) 13:30～16:30

事業

会場 国立西洋美術館講堂

講演 (1) 古代木彫仏研究序説—型と素材をめぐって— 長岡 龍作

(2) 日本美術観の形成 佐藤 道信

芸能部 (第23回)

日時 平成4年12月10日(木) 18:00~20:30

会場 矢来能楽堂

テーマ 扇の技法——そのリズムと所作——

講演 (1) 扇の芸能史的展開 中村 茂子

講演 (2) 能・狂言の演技と扇 羽田 昶

実演 (1) 風流踊「花笠踊」「鹿島踊」「綾子舞」

日本民俗舞踊研究会

狂言小舞「大原木」「七つ子」 吉積 史高, 小笠原 匡

話 須藤 武子, 野村 耕介 (聞き手) 羽田 昶, 中村 茂子

4. 夏期学術講座

芸能部

芸能部では、芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として、例年夏期4日間にわたる学術講座を、首都圏各大学の大学院生を対象に実施している。会場を東京国立文化財研究所会議室とし、芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に論ずる。

平成4年度は「日本の音楽理論用語」というテーマを設けて蒲生郷昭が担当し、7月13日から16日までの4日間にわたり実施した。受講者は東京芸術大学、お茶の水女子大学、明治大学、早稲田大学、慶応義塾大学、実践女子大学、国立音楽大学の各大学院生で、受講者数は17名。日程及びテーマ細目は下記の通りである。

7月13日(月)

序説

日本の十二律

序・破・急

7月14日(火)

三重

間、拍子

「唄（うた）」字

7月15日（水）

中曲（「中」その1）

中音（「中」その2）

中音（承前）（「中」その3）

7月16日（木）

中下ゲ（「中」その4）

中ノリ（「中」その5）

質疑

5. 博物館・美術館保存担当学芸員研修

近年博物館、美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存・修理室などの保存に係る施設設備が整備されて保存部門を担当する職員が配備されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適当な学習の場や教材がないのが実情である。そのため博物館、美術館などの学芸員の保存担当者を対象に、文化財の科学的保存に関する基本的な知識および技術について研修を行い、その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし、研修会を開催した。受講者数は20名。日程および講師は下記の通りであった。

7月27日（月）

開講式・オリエンテーション

保存修復総論

所長 西川杏太郎

文化財の材質と劣化－無機材質を中心に－ 化学研究室長 平尾 良光

文化財の材質と劣化－有機材質を中心に－ 物理研究室 佐野 千絵

7月28日（火）

保存環境総論－文化財の保存と環境－ 保存科学部長 新井 英夫

展示環境各論Ⅰ－屋内汚染、原因と調査－ 佐野 千絵

事業

展示環境各論Ⅱ－屋内汚染の実例－保存科学部主任研究官 石川 陸郎

7月29日(水)

展示環境各論Ⅲ－屋外展示物－ 保存科学部主任研究官 門倉 武夫

展示照明Ⅰ－影響と対策－ 物理研究室長 三浦 定俊

展示照明Ⅱ－照明の種類と取扱－ 石川 陸郎

7月30日(木)

温湿度－影響と対策－ 三浦 定俊

温湿度－実習／機器の種類と取扱－ 三浦 定俊

温湿度－実習／湿度の制御法－ 三浦 定俊

7月31日(金)

生物被害－虫／害虫の生体と被害－ 保存科学部調査員 山野 勝次

生物被害－黴／要因とメカニズム－ 新井 英夫

生物被害－実習／加害生物防除法－ 新井 英夫

8月3日(月)

科学的調査法総論－調査法の種類－ 平尾 良光

科学的調査法各論Ⅰ－化学的分析法－ 平尾 良光

科学的調査法各論Ⅱ－科学写真－ 三浦 定俊

8月4日(火)

文化財科学の動向 名誉研究員 馬淵 久夫

修復材料・技法－合成樹脂の種類と用途－ 名誉研究員 樋口 清治

劣化と保存 各論Ⅰ－木－ アジア文化財保存研究室長 西浦 忠輝

劣化と保存 各論Ⅱ－石－ 西浦 忠輝

8月5日(水)

劣化と保存 各論Ⅲ－表具－ 第2修復技術研究室長 増田 勝彦

劣化と保存 各論Ⅳ－油彩画－ 国立西洋美術館 河口 公夫

劣化と保存 各論Ⅴ－考古遺物保存－ 修復技術部長 三輪 嘉六

劣化と保存 各論Ⅵ－金属遺物－ 第3修復技術研究室長 青木 繁夫

劣化と保存 各論Ⅶ－漆芸品－ 第1修復技術研究室長 中里 壽克

8月6日(木)

ケーススタディ X線撮影コース－技術－ 石川 陸郎

8月7日(金)

討論会・閉講式

6. 国際研究集会

「文化財の保存に関する国際研究集会」は毎年特定の主題を選び、昭和52年度より毎年開催しているが、第16回にあたる本年度は「東アジア美術における〈人のかたち〉」を主題とし、美術部・情報資料部が担当した。今回は〈人のかたち〉の諸相、群像表現、人体表現における形と意味、裸体表現の諸問題の4つのサブテーマを設けてこれをセッションのタイトルとした。研究集会は、2つの基調講演と19の研究発表、討論(セッションII・III・IV)をもって構成し、海外から5名、国内より14名(共同研究発表者1名を含む)の研究発表者を迎えた。参加者は国内外を合せ199名を数えた。日程および発表題目は以下の通りである。

名 称: The 16th International Symposium on the Preservation of Cultural Property:

Human Figure in the Visual Arts of East Asia

(東アジア美術における〈人のかたち〉)

日 時: 平成4年9月29日~10月1日

会 場: 国立西洋美術館講堂

題名および発表者

9月29日(火)

【基調講演】

I. 人の〈かたち〉と〈からだ〉

新潟県立美術館 前川 誠郎

II. The Human Figure in the Visual Arts of East Asia from a European Point of View (西洋の眼からみた東洋美術の〈人のかたち〉)

チューリッヒ大学/リートベルク美術館 ヘルムート プリンカー

【セッションI】〈人のかたち〉の諸相

1. 人物画における聖と俗—宗教性と肖像性—

事 業

東京大学東洋文化研究所 戸田 禎佑

2. 人のかたちを神の領域へー古代東アジア彫像の課題ー

奈良大学 井上 正

3. 〈唐子〉論ー歴史としての子供の身体ー

東京大学史料編纂所 黒田日出男

4. *Yōga* and the Sexual Structure of Cultural Exchange

(洋画と文化交流における性的枠組み)

ハーバード大学 ノーマン ブライソン

5. 日本人の身体観

東京大学 養老 孟司, 布施 英利

9月30日(水)

【セッションII】群像表現

6. 仏教絵画における群像表現

九州大学 平田 寛

7. 物語絵画における群像表現

武蔵野美術大学 佐野みどり

8. 風俗画における群像表現ー主題としての群衆ー大阪大学 奥平 俊六

【セッションIII】人体表現における形と意味

9. Dressed for Salvation-the *Hadaka* Stature of the Twelfth and Thirteenth Centuries (救済への装いー12・13世紀の裸形像ー)

アマースト大学 サミュエル C. モース

10. 一休をめぐる何が起こったかー肖像画における「破格」の問題ー

ニューヨーク・メトロポリタン美術館 大西 廣

11. 嫉妬のかたちー曾我蕭白の美人図をめぐるー

大和文華館 林 進

12. 柿本人麿像における“かたち”と“意味”

東京国立文化財研究所 島尾 新

10月1日(木)

【セッションIV】裸体表現の諸問題

13. 民国期中国における裸体画問題 東京国立文化財研究所 鶴田 武良

14. 韓国近代洋画における「裸体」 徳成女子大 金 英那

- | | | |
|----------------------|------------|-------|
| 15. 日本美術の伝統に見る「はだか」 | 東京大学 | 辻 惟雄 |
| 16. 人から人“間”へー個としての人体 | 東京国立文化財研究所 | 佐藤 道信 |
| 17. “極東ギリシア”の裸体像 | 早稲田大学 | 丹尾 安典 |
| 18. 文明開化のなかの裸体 | 美術評論家 | 北澤 憲昭 |
| 19. 見世物のなかの〈人のかたち〉 | 兵庫県立近代美術館 | 木下 直之 |

7. アジア文化財保存セミナー

世界的視野の中で、いくつかの文明の拠点を持つアジアには、数千年の歴史の中で産み出され伝承されてきた文化財が、さまざまな状況の中で保存されている。それらの文化財は、各時代に各地域で栄えた固有の文化の証であり、当事国の財産であると同時に、人類共通の遺産でもある。本セミナーは、東アジア、東南アジア、西南アジアの諸国に呼びかけ、文化財の保存に関連する基礎的情報を交換し、将来の多国間の共同研究・共同事業を推進するための礎を築くことを目的として企画されたものである。本年度はその第3回目として、「木造文化財の保存と国際協力」をテーマとして開催された。

会議は、2名の基調講演発表者と15カ国代表15名のカントリーレポート報告者、さらに、4名の考古、美術工芸、保存の専門家で構成される日本代表デスクが加わり、円卓を囲んで行われた。また、文化財保存の専門家約30名がオブザーバーとして参加し、活発な討議が行われた。日程等内容は下記の通りである。

名 称 アジア文化財保存セミナー

ー木造文化財の保存と国際協力ー

主 催 文化庁・東京国立文化財研究所

協 力 奈良国立文化財研究所・京都国立博物館・東京国立博物館・
奈良国立博物館・ユネスコ・アジア文化センター

場 所 国立京都国際会館 他

日 程

11月19日(木) 開会式およびレセプション(上野精養軒)

11月20日(金)～21日(土) 国外参加者の視察・見学

事 業

11月22日(日)

1. 奈良国立文化財研究所長 鈴木嘉吉 (基調講演)
「木造文化財の保存」
2. 韓国文化財管理局文化財研究所専門委員 姜大一
「韓国における木造難破船の保存」
3. 中国文物研究所主任技師 孔祥珍
「中国における歴史的木造建造物の保存」
4. インドネシア文化教育省歴史考古遺産保護部保存課長 S. ウィナルノ
「インドネシアにおける歴史的木造建造物の保存」
5. ヴェトナム保存・博物館局長 ルー・トラン・T.
「ヴェトナム北部の塔および集会場の保存」
6. スリランカ考古局長 M.D. ラルチャンドラ
「スリランカにおける木造建築物の保存」
7. ブータン文化特別委員会技官 K. ゲルチェン
「木造記念物の保存と国際協力」

11月23日(月)

8. 国際文化財保存修復研究センター長 M. ラーネン (基調講演)
「文化財保存における国際共同研究」
9. インド国立文化財研究所企画官 T. シン
「インドにおける木造文化財の保存」
10. ヘリテージ・ネパール代表 S. アマティヤ
「ネパールにおける木造文化財の保存と国際協力」
11. マレーシア国立博物館保存課長 Z.I. オスマン
「マレーシアで一般に用いられている防黴剤の効果, 特に屋外木造物への応用について」
12. ラオス情報文化省博物館・考古局考古部技官 S. カンラナ
「木造建造物の虫害について」
13. フィリピン国立歴史研究所長 S.D. キアソン
「フィリピンにおける木造文化財の保存と国際協力」

11月24日(火)

14. 武蔵野美術大学教授 田辺三郎助

「日本の木造文化財とその保護の現状」

15. タイ芸術総局博物館部保存主任研究員 C. アラニャナク

「タイにおける木造文化財の保存—その現状と課題—」

16. モルディブ国立言語歴史研究センター副所長 A.S. ハサン

「モルディブにおける木造文化財の保存」

17. カンボジア プノンペン芸術大学副学長 S.B. ホー

「カンボジアにおける木造文化財の保存」

総合質疑応答

座長 国際文化財保存修復研究センター理事 馬淵 久夫

国際文化財保存修復研究センター長 M. ラーネン

総合討議

閉会式

11月25日(水)

京都国立博物館文化財保存修理所見学 (外国人招待者のみ)

懇談会

京都国立博物館見学

11月26日(木)

サイトセミナー (外国人招待者のみ)

奈良国立文化財研究所、法隆寺ほか

8. 第1回「紙の保存修復」の国際研修

世界の紙の修復専門家15名(15カ国)を集め、文化庁および国際文化財保存研究センター(ICCROM)と共同開催で「紙の保存修復」国際研修を行った。脆弱な古文書や版画など、紙を素材とした文化財の修理では、世界の文化財に日本の表具技術が役に立つ事が知られるようになっている。この研修では、この日本の表具技術を伝えることを目的とした。

3週間の研修は表具の基本的な技術を参加者が経験できるような内容の実技研修を中心としたが、日本の文化史・文化財保護法の沿革・文化財に使わ

事 業

れている伝統的な素材・和紙と洋紙の特性等についての講義を行うとともに、研修旅行では和紙の紙漉場で修復材料である和紙をより深く理解するようつとめた。

海外から、より正確な技術を求める声が増える中、今回のような日本の専門家の直接の指導のもとで行われる研修会は意義は深いと確信している。

<主催>

東京国立文化財研究所

文化庁

イクロム (ICCROM)

INTERNATIONAL CENTRE FOR THE STUDY OF THE
PRESERVATION AND THE RESTORATION OF CULTURAL PROPERTY

<協力> 京都国立博物館

<期間> 平成4年10月26日～11月14日 20日間

<場所> 10月26日～28日 東京国立文化財研究所

10月29日～11月14日 京都国立博物館

スタディーツアー 奈良市・奈良県宇陀郡吉野町

<参加者>

HENDERSON Kathryn Anne

オーストラリア戦争記念館

ヘンダーソン キャスリン アン

CHRISTO Tatiana

ブラジル国立ファンダサオ図書館

クリスト タチアーナ

GUILD Sherry A.L.

カナダ国立文化財保存センター

ギルド シェリー

MUJICA M. Paloma

チリ国立中央保存修復所

ムジカ パロマ

FASTENAU Eva

ドイツストットガルト州立民族学博物館

ファストナウ エバ

CSILLAG Ildiko

ハンガリー国立セチェーニ図書館

シラク イルディコ

RANJIT Vasavan Prema ランジット バサバン プレマ	インド国立手工芸織物博物館
BARKESHIL Mandana バーケシル マンダナ	イラン国籍 インド国立博物館美術 史・保存・博物館学研究所（留学中）
ISMAIL Daresah イスマイル ダレサー	マレーシア国立文書館
MADANI Zubair Ahmed マンダニ ツバイル アームド	パキスタン国立博物館
CARVALHO M. Gabriela カルバロ ガブリエラ	ポルトガル ジョゼ・デ・フィオベレド 研究所
ERICSON Martin エリクソン マーティン	スエーデン西部地域文化財保存トラスト
NGAMDAN Kwanjit ガムダン クワンジット	タイ芸術総局保存部
EVANS Ann Rhiannon エバンス アン ライアノン	イギリス大英博物館
NEWMAN Walter Eric ニューマン ウォルター エリック	アメリカ北東地域文書保存センター

9. 会 議

(1) 第4回国際文化財保存修復協力センター〈仮称〉設置 に関する調査研究会

アジアの文化財の保存、修復に関する国際的な研究交流、保存修復事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たすとともに、文化財の保存修復に関する研究の向上に資することを目的とするアジア文化財保存修復協力センター〈仮称〉設置のための調査研究会として、外部の専門家、文化庁および東文研関係者が出席し、センターの設置目的、事業内容、組織、管理運営、施設等に関する事項について、検討、協議を行った。

日 時 平成5年3月8日(月) 14時～17時

場 所 別館会議室

事業

出席者 東文研15名、外部（文化庁、大学、国際機関他学識経験者）16名

総括 本調査研究会における検討、協議内容は次のように総括される。
文化財は人類共通の遺産であり、国家、民族を越えてその保存・修復にあたらなければならず、そのためには国際協力が不可欠である。文化財保護法のもと、文化財保護体制・技術・研究の整っている日本がこの面で果たすべき役割はきわめて大きく、実際、世界各国から多くの協力を求められている。これらの要請に対処するため、東京国立文化財研究所に国際共同研究、情報の収集と提供、人材養成を3本の柱とした国際的な協力センターを設立することがぜひ必要である。今後、調査研究をさらに拡大、進展させ、アジア地域を含む世界の文化財の保存修復に協力する。文化財保存修復国際協力センター〈仮称〉設置に向けての、具体的な調査研究を行うべきである。

(2) 文化財保存修復研究協議会

主 題 文化財保存と環境汚染

日 時 平成5年2月26日(金)

場 所 国立文化財研究所会議室

主 旨

近年の酸性雨問題など、汚染にともなう自然環境の変化は、文化財の保存についても深刻な影響を及ぼしていると考えられる。とくに野外にある文化財では保存上憂慮されるものも少なくない。こうした状況に鑑み、文化財をとりまく環境汚染の実態を検討し、文化財への影響評価、保存と修復に関する調査研究の向上を図ることを目的とする。

講 演

大気汚染と文化財保存研究の歩み

東京国立文化財研究所

門倉 武夫

環境汚染が原因と考えられる文化財劣化の現状 1

文化庁美術工芸課

根立 研介

環境汚染が原因と考えられる文化財劣化の現状 2

事 業

文化庁建造物課	光井 渉
保存対策の事例	東京国立文化財研究所
我が国における酸性雨の現状	国立環境研究所
大気汚染とその影響	東京都環境科学研究所
環境の影響評価について	日本鋼管総合材料技術研究所
	青木 繁夫
	佐竹 研一
	古明地哲人
	松島 巖

10. 国際・国内交流

(1) 平成4年度職員の海外渡航

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
三浦 定俊	ドイツ	ドイツとの学術交流	自平成4年5月8日 至平成4年5月17日	文部省国際学術局
三輪 嘉六	ナイジェリア ジンバブエ	古美術品発掘計画及び青銅器文化財等保存修復のための指導・助言	自平成4年5月11日 至平成4年5月27日	国際交流基金
青木 繁夫	〃	〃	〃	〃
三輪 嘉六	中国	敦煌莫高窟壁画の保存協力	自平成4年6月10日 至平成4年6月24日	科学研究費
三浦 定俊	〃	〃	〃	外国旅費
西浦 忠輝	〃	〃	〃	〃
岡田 健	〃	〃	〃	〃
朽津 信明	〃	〃	〃	〃
勝木言一郎	〃	石窟寺院の調査	自平成4年8月28日 至平成4年9月15日	私費
三輪 嘉六	〃	敦煌莫高窟壁画の保存協力	自平成4年10月9日 至平成4年10月19日	科学研究費
三浦 定俊	〃	〃	〃	〃
勝木言一郎	〃	〃	〃	〃
朽津 信明	〃	〃	〃	〃
中野 照男	〃	〃	〃	外国旅費
富澤 邦明	〃	〃	〃	〃
西川杏太郎	〃	日中文化交流に関する協議	自平成4年11月16日 至平成4年11月25日	外国旅費
西浦 忠輝	イタリア	国際会議「石造品の表面保護剤と文化財の保存」への出席等	自平成4年10月3日 至平成4年10月12日	イタリア国立研究機構 (屋外文化財保存研究センター)
鶴田 武良	中国	故宮博物院明清絵画及び現代中国画の調査	自平成4年10月5日 至平成4年10月11日	日中友好会館

事業

氏 名	渡 航 先	目 的	期 間	旅費の出所等
米倉 迪夫	中国	唐代壁画調査	自平成4年10月16日 至平成4年10月23日	私費
鈴木 廣之	台湾、香港	在台湾・香港 中国絵画の調査	自平成4年10月23日 至平成4年11月25日	私費
井手誠之輔	〃	〃	〃	私費
平尾 良光	韓国	韓国考古遺物の自然科学的研究	自平成4年10月26日 至平成4年10月31日	湖嶺美術館
中野 照男	アメリカ	在米日本絵画彫刻作品の調査	自平成4年11月2日 至平成4年11月17日	古文化財科学研究会
島尾 新	〃	〃	〃	〃
長岡 龍作	〃	〃	〃	〃
川野邊 渉	イタリア イギリス	有機質文化財の保存に関する調査 研究	自平成4年12月11日 至平成5年10月10日	文部省在外研究員
三浦 定俊	タイ	タイ国石造遺跡の劣化と保存処置 に対する調査研究	自平成4年12月6日 至平成4年12月19日	科学研究費
西浦 忠輝	〃	〃	〃	〃
朽津 信明	〃	〃	〃	〃
岡田 健	タイ カンボジア	彫刻資料の収集と現地調査	自平成4年12月7日 至平成4年12月26日	科学研究費
井手誠之輔	韓国	在韩国 中国絵画の調査	自平成4年12月7日 至平成4年12月12日	私費
新井 英夫	メキシコ アメリカ	テオティワカン遺跡の修復・保存 のための生物学的・科学的実地調 査並びに指導及び協議	自平成5年1月18日 至平成5年2月7日	国際交流基金
西浦 忠輝	〃	〃	〃	〃
鈴木 廣之	アメリカ	在米日本絵画彫刻作品の調査	自平成5年2月22日 至平成5年3月4日	古文化財科学研究会
島尾 新	〃	〃	自平成5年2月22日 至平成5年3月7日	〃
岡田 健	〃	〃	自平成5年2月22日 至平成5年3月10日	〃
井手誠之輔	フランス他欧州 各国及びアメリカ	欧米コレクションにおける東アジ ア絵画の調査研究	自平成5年3月15日 至平成6年1月10日	文部省在外研究員

事業

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
増田 勝彦	アメリカ	日本美術品の調査	自平成5年3月23日 至平成5年3月31日	古文化財科学研究会
三輪 嘉六	シリア	アイン・ゲラ遺跡の保存計画メ ニューの策定指導及び石造遺跡の 修復・保存に関する講義等	自平成5年3月29日 至平成5年4月13日	国際交流基金
西浦 忠輝	〃	〃	〃	〃

(2) 招へい研究員

昭和53年度より招へい研究員制度が設けられ、平成4年度には国外34名の研究員を招へいし、下記のように共同研究が行われた。

国外招へい研究員

氏名	国籍	役職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
金正 羅	中国	中国社会科学院世界宗教研究所	3.7.1 ～ 5.8.31	中国製青銅器の鉛同位体比に関する共同研究	保存科学部室長 平尾 良光
Yuksel DEDE ユクセル デデ	トルコ	イスタンブール大学講師	3.11.28 ～ 4.4.27	金属遺物の安定化処理を中心とする考古資料の保存修復研究	修復技術部室長 青木 繁夫
Costas HASAPOPO ULOS コスタス ハサポポロス	キプロス	キプロス文化財保存技術研究員	4.2.24 ～ 4.8.25	文化財保存修復のための研究	修復技術部室長 中里 壽克
姜 大 一	韓国	韓国文化財研究所	4.4.20 ～ 4.10.19	文化財保存のための技術研修	修復技術部室長 青木 繁夫
陳 元 生	中国	上海博物館副研究員	4.7.1 ～ 4.12.8	中国古書画の変色	保存科学部長 新井 英夫
Petr JUSTA ベトル ユスタ	チェコスロバキア	中部ボヘミア博物館保存部長	4.8.31 ～ 4.10.30	歴史的モニュメントの微生物浸蝕からの保護と修復	保存科学部長 新井 英夫

事業

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
◎ Jumpot TRATSIRI ジュンボット トラシリ	タ イ	タイ国芸術総局考 古部技師	4. 9. 3 ～ 4. 9.10	タイ国石造遺跡の劣化 現象と保存処置に関す る調査研究	アジア文化財保存 研究室長 西浦 忠輝
◎ Pornthum THUMWIMOL ポーンタム タムウイモル	タ イ	タイ国芸術総局考 古部技師	4. 9. 3 ～ 4. 9.10	タイ国石造遺跡の劣化 現象と保存処置に関す る調査研究	アジア文化財保存 研究室長 西浦 忠輝
Gabriela KRIST ガブリエラ クリスト	オースト リア	プログラマーオ フィサー	4.10.12 ～ 4.11.21	「紙の保存修復」研修 の準備及び実施	修復技術部室長 増田 勝彦
小山真由美	日 本	P.A.ガルト美術 館東洋美術担当学 芸員	4.10 ～ 5. 3.31	イタリアにおける日本 美術の保存に関する研 究	修復技術部室長 中里 壽克
※ 張 擁 軍	中 国	敦煌研究院保護研 究所助理研究員	4.11.18 ～ 5.2.14	コンピュータを応用し た保存環境の計測技術 に関する研究	所 長 西川杏太郎
Marc LAENEN マーク ラーネン	ベルギー	イクロム所長	4.11.21 ～ 4.11.26	文化財の保存の国際協 力に関する調査研究	アジア文化財保存 研究室長 西浦 忠輝
※ 孫 儒 側	中 国	敦煌研究院 前保護研究所長	4.12.14 ～ 5.2.14	木造古建築の保存・修 復に関する調査研究	所 長 西川杏太郎
張 清 涛	中 国	敦煌研究院考古研 究所助理館員	5.1.18 ～ 5.3.19	文化遺物収拾方法等の 研修	修復技術部長 三輪 嘉六
※ 金 理 那	韓 国	弘益大学美術史学 科教授	5. 2. 1 ～ 5. 2.21	韓国仏教彫刻と日本仏 教彫刻の比較研究	美術部室長 中野 照男
Peiman Bin KEROMO ペイマン ビン ケロモ	マレーシ ア	博物館部保存室長	5. 2.28 ～ 5. 3.10	文化財保存の実際と研 究動向に関する調査、 研修	アジア文化財保存 研究室長 西浦 忠輝
Sasithorn KONGPRA KAIWOOD サシトーンコン ブライウッド	タ イ	芸術局考古部文化 財保存計画室長	5. 2.28 ～ 5. 3.10	文化財保存の実際と研 究動向に関する調査、 研修	アジア文化財保存 研究室長 西浦 忠輝

事 業

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
Varopas VONGJATU RAPAT ヴァロパス ヴィンジャトゥ ラパット	タ イ	芸術局考古部文化 財保存計画室員	5. 2.28 ～ 5. 3.10	文化財保存の実際と研 究動向に関する調査、 研修	アジア文化財保存 研究室長 西浦 忠輝
※ Todd K. HINKLEY トッド k. ヒンクレイ	アメリカ	アメリカ地質学調 査所研究員	5. 3. 7 ～ 5. 3. 17	石器時代に関する新し い年代測定法の共同研 究	保存科学部室長 平尾 良光
※ Richard D. SMITH リチャード スミス	アメリカ	Wei T'o Associ- ates, Inc社長 Wei T'o Canada, Inc社長	5. 3. 9 ～ 5. 3.16	非水性脱酸性処理の日 本美術への応用とその 影響について、日本研 究者及び専門家と検討 を行う。	修復技術部室長 増田 勝彦
※ Mariannu WEBB マリアンヌ ウェブ	カナダ	カナダ ロイヤル オンタリオ博物館 保存修理担当官	5. 3.11 ～ 5. 3.26	日本の漆工芸品の保存 修理の共同研究	修復技術部室長 中里 壽克
◎ Pamela VANDIVER パメラ バンディバー	アメリカ	スミソニアン研究 機構保存分析研究 所	5. 3.18 ～ 5. 3.30	科学技術を利用した文 化財の研究法の開発	保存科学部室長 三浦 定俊
※ Eddy De WITTE エディ ドウ ウィッタ	ベルギー	ベルギー王立文化 財研究所研究部長	5. 3.18 ～ 5. 3.31	石造文化財の保存に関 する調査研究	アジア文化財保存 研究室長 西浦 忠輝
※ 李 午 意	韓 国	湖巖美術館保存科 学研究室長	5. 3.19 ～ 5. 3.26	韓国及び周辺地域にお ける出土青銅器の考古 学的、自然科学的	保存科学部室長 平尾 良光
※ 鄭 永 東	韓 国	文化財管理局慶州 文化財研究所保存 科学室	5. 3.19 ～ 5. 3.25	文韓国及び周辺地域に おける出土青銅器の考 古学的、自然科学的共 同研究	修復技術部室長 青木 繁夫
※ 李 容 喜	韓 国	文化財研究所保存 科学研究室	5. 3.19 ～ 5. 3.26	韓国及び周辺地域にお ける出土青銅器の考古 学的、自然科学的共 同研究	修復技術部室長 青木 繁夫

事業

氏名	国籍	役職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
◎ Michael KUELEN THAL ミハエル キューレン タール	ドイツ	バイエルン州文化財研究所修復技術部長	5.3.22 ～ 5.3.31	文化財保存に関する日独学術交流のための予備的調査	保存科学部室長 三浦 定俊
◎ Siegfried ENDERS ジークフリート エンデルス	ドイツ	ヘッセン州立文化財保護局建造物・都市計画担当官	5.3.22 ～ 5.3.31	文化財保存に関する日独学術交流のための予備的調査	保存科学部室長 三浦 定俊
※ Richard SMITH リチャード スミス	アメリカ	ウエイツ アソシエイト会社社長	5.3. 8 ～ 5.3.16	非水性脱酸性処理の日本美術品への応用とその処理	修復技術部室長 青木 繁夫
※ Philip MEREDITH フィリップ メレディス	オランダ	極東美術保存センター修復専門官	5.3.21 ～ 5.3.29	オランダにおける日本文化財総合調査及び保存事業の概要調査	修復技術部室長 増田 勝彦
※ Matthi FORRER マティフォーラー	オランダ	国立民族学博物館ライデン学芸員	5.3.21 ～ 5.3.29	オランダにおける日本文化財総合調査及び保存事業の概要調査	修復技術部室長 増田 勝彦
呂 理 政	台湾	国立台湾先史文化博物館設立事務所研究員	5.3. ～ 5.4.	考古遺跡、遺物の保存処理方法等の研修	修復技術部長 三輪 嘉六
葉 美 珍	台湾	国立台湾先史文化博物館設立事務所研究員	5.3. ～ 5.4.	考古遺跡、遺物の保存処理方法等の研修	修復技術部長 三輪 嘉六

注1) ※は研究所予算で招へいしたことを表す

注2) ◎は科学研究費補助金で招へいしたことを表す

注3) 国際研究集会(5名)、アジア文化財保存セミナー(14名)、紙の保存修復国際研修(15名)の国外招へい研究員については各々の項に記載した。

国内招へい研究員

氏名	現職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
尾崎 直人	福岡市美術館学芸員	5.2.9 ～ 5.2.19	画像データベースの構築に関する研究	情報資料部室長 米倉 迪夫

(3) 平成4年度海外研究者の来訪

氏 名	国 籍	所 属 等
ゲレオン・ジー バー・ニッヒ	ド イ ツ	ベルリン芸術祭公社
王 炳 華	中 国	新疆文物考古研究所長 他4名
申 昌 秀	韓 国	慶州文化財研究所学芸研究官 他2名
チュチ フォウン	カンボジア	プノンベン芸術大学副学長
李 向 罡	中 国	国家档案局副所長
アン・ヨネムラ	ア メ リ カ	スミソニアン研究機構 フリア美術館
ファイザ・ヘイ カル	エ ジ プ ト	カイロ大学教授 他1名

V. 研究施設・設備

1. 蔵 書

美術関係図書

日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたる研究書を中心に、関連図書、各種叢書、辞典類など、和漢書(40,994)、洋書(4,078)、計45,072冊のほか、各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書、美術関係雑誌、紀要類、売立目録、展覧会目録などを所蔵し、所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書9,518冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学部・修復技術部関係図書

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び物理学・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて3,128冊を所蔵している。

本年度における取書数と総計は次表のとおりである。

区 分	美 術 関 係		芸 能 関 係		保 存 科 学 ・ 修 復 技 術 関 係		計
	和 漢 書	洋 書	和 漢 書	洋 書	和 漢 書	洋 書	
4 年 度	446 冊	12 冊	164 冊	4 冊	20 冊	40 冊	686 冊
総 数	40,994 冊	4,078 冊	9,393 冊	125 冊	2,069 冊	1,059 冊	57,718 冊

2. 資 料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書籍、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数およそ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム229巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード、録音テープ、シネフィルム、ビデオテープ、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、つぎのとおりである。

区 分	録 音 テ ー プ		シネフィルム		ビデオテープ	
	analog	digital	8 mm	16 mm	β, VHS方式	8 mm
平成4年度	0本	3本	0本	0本	65本	17本
合 計	2,852本	334本	198本	4本	334本	39本

区 分	音 盤 等		
	SP・LP	CD	VHD・LD
平成4年度	0枚	34枚	0枚
合 計	7,118枚	62枚	14枚

3. 主要機器・設備

美術部・情報資料部		
名 称	使 用 目 的	備 考
X線透過撮影装置	軟X線照射による絵画・彫刻の顔料・構造等の非破壊分析。	
紫外線照射装置	紫外線照射による蛍光物質の分析。補絹・補彩領域の明別。	
顕微鏡装置	双眼実体顕微鏡による美術作品細部の非接触観察。	KARL ZEISS
赤外線テレビ関係設備	赤外線照射による墨線の抽出。下図・銘文等の解説。	浜松テレビ
ビデオイメージスコープ	内視鏡による彫刻作品等の内部観察。	オリンパス
ローカルエリアネットワーク	LANによる情報処理の円滑化。情報の統合・共有化。	NET ONE (アングマンバス)
画像処理装置	デジタル画像処理技術による多角的画像分析。画像データベースの試作。	NEXUS 6800 シリーズ
光ディスクファイリングシステム	大量の調書・カード類の一括管理。簡易画像データベースの試作。	RIFILE

研究施設・設備

芸能部		
名 称	使 用 目 的	備 考
舞台（視聴室）	日本の古典芸能を実演するのに必要最小限の広さを持ち、実技者を招いて分析研究のための実演を行う。 またその実演を舞台に続く調整室で撮影し録音する。	間口 590 cm 奥行 585 cm 残 響 時 間 0.30/秒
録音室	実技者を招いて分析研究のための、良質な録音を行う。	残 響 時 間 0.15/秒 アナログ、デジタルの録音可能。
メログラフ	音の高さと強さの細かい変化を正確に計り、分かりやすいグラフで記録して、音楽の科学的分析を行う。	型名 B/T
レーザー・ターンテーブル	レーザー光でアナログ・レコードを非接触で再生する。貴重なレコードを半永久的に使用できる。	エルプLT-IX

保存科学部		
名 称	使 用 目 的	備 考
蛍光X線分析装置	金属、顔料、岩石、土器などの化学組成を非破壊的に測定する。理学電機製は可搬型である。	フィリップス PW 1404 理学電機TBF 01
X線回折装置	粉末にした金属、岩石、土器、顔料などの結晶を同定する。理学電機製は可搬型である。	日本電子 JDX-10 PA 理学電機TBD 10
原子吸光分光分析装置	岩石、土器、金属などに含まれる元素を定量する。	ジャーレルアッシュ AA 8500
誘導結合プラズマ分光装置（ICP）	岩石、土器、金属などに含まれる元素を定量する。	セイコー SPS 1100
質量分析装置	鉛、ストロンチウム同位体比測定から、青銅、岩石の原料産地を推定する。	VG Sector
イオンクロマト分析装置	岩石、鏝中の陰イオン濃度や空気中のSO _x 、NO _x 濃度の測定を行ない、鏝の進行状況や空気汚染の程度などを推定する。	横河電気 IC 500 P

名 称	使 用 目 的	備 考
電子スピン共鳴装置	遷移金属イオンや劣化に伴って生じるフリーラジカルを測り、劣化の進み方や程度を知る。	日本電子 JES-RE1X
化学発光分析装置	化学反応にともなって放出される微弱光を測り、反応の進み方や劣化の度合いを知る。	東北電子CL-100
自記分光放射計	分光スペクトルを測定して、展示に用いる光源や紫外線吸収ガラス、フィルムなどの性能をしらべる。	日本分光 SR 500 B
走査型電子顕微鏡	高倍率で試料表面の状態を観察するとともに構成元素の分布を調べ、構成材料や構造、技法について知る。	日本電子 JXA-840
工業用X線検査装置	透視撮影によって彫刻・工芸・考古遺物などの構造や光電子撮影によって絵画の顔料をしらべる。	フィリップス MG 321 他
減圧燻蒸装置	文化財加害生物を防除するための燻蒸法の研究、行う。	SK 2 型
生物顕微鏡	微生物プレパラートを透過光および落射蛍光にて観察し、加害生物種の同定などをおこなう。	ニコンマイクロフォトFX
微生物検体作製装置	微生物胞子の発芽に及ぼす風の影響をしらべる。	小林精機CP型

修復技術部

名 称	使 用 目 的	備 考
減圧含浸装置	脆弱化した文化財に減圧下で樹脂を含浸する装置。	共和真空
プラズマ装置	酸化した出土金属遺物を水素プラズマを利用して還元処理する。	神港精機 MP 1017
エアーブラッシュ	出土金属遺物の錆や泥をクリーニングする。	S.S WHITE K
真空凍結乾燥機	水浸木材等の有機遺物を乾燥処理する。	共和真空 RLW-20 MB

研究施設・設備

名 称	使 用 目 的	備 考
サンシャインウェザーメーター	修復材料等の耐候性試験	スガ WEL-SUN-DC
強度試験機	紙・布の各種処理後の強度を測定して、処理法による影響を判断する。	島津 AC-25 TB
紫外線フェードメータ	塗料・有機材料の耐候性試験	スガ
大型ステージ顕微鏡	文書、染織品などを平置のまま構造を観察できる大型移動ステージ(1×1 m)を備えた光学顕微鏡。	三啓 SLP-1000 型
走査型レーザー顕微鏡	レーザーを走査して、天然物などを光学顕微鏡と同じ深い被写界深度で観察を行う。	レーザーテック(株) ILM 21 型

4. 黒田記念室

黒田記念室は、本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「智・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

5. 閲 覧 室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は、主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。

VI. 関係法規

◎文部省組織令(抄) (昭和59 政令第227号
最終改正 昭63政101号, 197号)

第2章 文化庁

第3章 施設等機関

(施設等機関)

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2. 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

(国立文化財研究所)

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2. 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3. 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

(研究施設の指定)

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則(抄) (昭和28年 文部省令第2号
最終改正 平2文令13号)

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

(名称及び位置)

関係法規

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

(所 長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2. 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課、次の五部及びアジア文化財保存研究室を置く。

- (1) 美 術 部
- (2) 芸 能 部
- (3) 保存科学部
- (4) 修復技術部
- (5) 情報資料部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- (1) 職員の人事に関する事務を処理すること。
- (2) 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- (3) 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- (4) 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- (5) 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- (6) 庁内の取締りに関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

2. 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2. 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2. 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析的調査研究を含む。）を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 物理研究室においては文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 生物研究室においては文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2. 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
4. 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復

関係法規

に関する科学的、技術的調程研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2. 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

3. 写真資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(アジア文化財保存研究室の事務)

第122条の4 アジア文化財保存研究室においては、アジアの文化財及びその保存に関する資料収集並びに調査研究及びその結果の公表を行う。

(客員研究員)

第122条の5 東京国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2. 客員研究員は、所長の命を受け、東京国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3. 客員研究員は、非常勤とする。

東京国立文化財研究所要覧（平成4年度）

平成5年12月1日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区上野公園13-27

電話（3823）2241（代表）
